

資料紹介

在外日本漢文資料探訪——上海・杭州

緒言

二〇〇四年九月二日～十日、高山節也拠点リーダーと筆者は、上海・杭州に出張し、日本漢文に関する資料調査と研究者交流<sup>註1</sup>を行った。本稿はその資料調査に関する報告である。

我々の21世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」では、(1) 日本漢文資料のデータベース化、(2) 研究者間の交流、(3) 研究者・書誌専門家の養成、(4) 漢文教育の振興、を4つの柱として掲げている。資料調査が持つ意義は、(1) の基礎データ収集のための作業であるのみならず、(3) の書誌専門家養成のための実習の場としても欠かせない。かつ、(1) のデータベース化のための世界規模の文献調査を、我々プロジェクトメンバーだけで達成することは困難であり、この実現には国内外の日本漢文資料所蔵機関、または日本漢文学及び近接領域の研究者との協力体制が不可欠である。この意味において、(1) は(2) の課題とも不可分の関係にある。

町 泉 寿 郎

実際、事情不案内、かつ時間の限られた海外における資料調査では、事前調査が成否をわける。今回は王宝平主編『中国館蔵和刻本漢籍書目』(杭州大学出版社、一九九五)・『中国館蔵日人漢文書目』(杭州大学出版社、一九九七)が一つの指針となった。各図書館一両日程度の調査で、所蔵する日本漢文資料すべてに詳細な書誌調査を行うことは不可能であるので、予めチェックしておいた資料を一日十点程度実見し、後は時間の許す限りカード目録・冊子目録から関係資料を拾いだした。そういう次第で、原資料の調査は著者の場合、勢いそこで見られない稀覯刊本、名家書入れ本、写本が多くなった。

調査対象は、同行の高山教授が経部の和刻本漢籍を対象とし、著者は医書の中の日本関係資料を対象とした。本稿が、我々の言う「日本漢文」が、従来想起されるところの漢詩・漢文に限らない、前近代日本の幅広い学芸分野を包摂するものであることを示す一助となれば幸いである。なお我々の対象とする「日本漢文資料」は、日本人が訓読法を用いて読み書きしてきた資料群をさし、漢籍(和刻漢籍や訓点付きの古鈔漢籍な

ど)・準漢籍<sup>ほま</sup>・(狭義の)日本漢文を包含するものである。

一、上海図書館(二〇〇四年九月三日調査)

A、上海図書館の日本関係古医書

上海図書館には、古籍資料の冊子目録がなく、電子テキスト化された目録データベースによって検索は可能であるが、その中から日本関係書を抽出することは困難である。よってカード目録の医学の部分(抽斗四函分)を検索して、日本関係書(和刻漢籍・日鈔漢籍・準漢籍・日本漢文、および上記の中国刊本・中国鈔本)を検出した。漢籍医書の分類は、専門家の間でも必ずしも定見をみないので、同館のカード目録の分類自体、一資料となりえよう。

調査の結果、同館所蔵の日本関係書は一六一タイトル一九一点を数える。うちわけは和刻本が六〇点、日人漢文著作(準漢籍二七点・日本漢文五三点)が八〇点。和刻漢籍・日鈔漢籍・日本人著作の中国刊本<sup>ほま</sup>が二二タイトル四四点で、これは少ない数ではない。なかには日本人著作の中国鈔本や、準漢籍と逆に日本人著作をもとに中国人が撰した著作とみられるものもある。内容別に見ると、「傷寒金匱之属」「方剂之属」が多く、多紀元簡著作、江戸医学館における善本漢籍の復刻本の多さも特筆すべきである。詳しくは後掲の資料を参照されたい。

B、『医学講習会日程』(『躋寿館出席留』零葉)

一、資料翻刻

カード目録検索の際に見出した従来未紹介の資料について紹介する。カードの記載は、「(日)佚名輯 医学講習会日程 (原名缺) 稿本一冊長461079」である。約H二四〇×W三二〇(耗)の和紙の半折(半紙本)一〇葉を糊付けして袋とじにし、後表紙のみ残る。裏面には後述のように古版零葉八枚が貼り合わされている。蔵書印は、朱文「上海図書館蔵」(二丁表)と白文「馮/雄」・朱文「南通馮氏景/岫楼蔵書」(一〇丁表)の三顆である。(図版1)

まず、翻刻を掲げる。翻刻に当っては、なるべく原本の用字・体裁を残した。各丁表裏を1丁表↓1才のように略記して付した。また当該部分の筆者をそれぞれの末に( )に入れて付記した。

翻刻

正月廿六日

一 靈枢 稲葉文貞

一 難経 縣玄節

元萇不快欠席 (稲葉筆 1才)

正月廿七日

一 傷寒論 森養竹

太陽中篇卅三麻杏甘石湯条より卅六厚朴生姜半甘參湯迄

橘不快堵席 (森筆 1ウ)

二月朔日

一 靈柩 稻葉文貞

一 傷寒論 難經 縣玄節

一金匱要略 佐藤元長

二月二日

一 傷寒論卅七より卅九迄森養竹

一 難經 橘宗俊

二月六日

一金匱要略 雜療方読了 佐藤元長

稻葉 縣不快缺席

二月七日

一 難經 橘宗俊

森風邪欠席

二月十一日

一 靈柩 稻葉文貞

一金匱要略 佐藤元長

縣不快缺席

二月十二日

一 傷寒論卅より卅四迄森養竹

一 難經 橘宗俊

二月十六日

講師不快休会

二月十七日

一 傷寒論卅五より五十迄 森養竹

一 難經 橘宗俊 (橘筆 5ウ)「

二月廿一日

一 靈柩 稻葉文貞

一金匱要略 佐藤元長

縣不快缺席

二月廿二日

一 傷寒論五一より五五迄 森養竹

橘氏不快堵席 (森筆 6ウ)「

二月廿六日

一 靈柩 稻葉文貞

一金匱要略 佐藤元長

金匱講畢、依例三会相休、三月十六日より再金匱講起仕候 元長

玄節疾飲痛二付引込御届書差出 (佐藤筆 7才)「

二月廿二日

一 難經至篇末

森氏風邪欠席 橘宗俊

難經講了、依旧三会休、自三月十七日再講仕候 橘宗俊 (橘筆)

三月朔日

文貞不快無抛欠席、右二付休会 (稻葉筆) (7ウ)「

三月二日

一 傷寒論五六より六四迄森養竹

(森筆)

三月六日

一 靈枢 稻葉文貞

(稻葉筆) (8才)

三月七日

一 傷寒論六五より六七迄森養竹

(森筆)

三月十一日

一 靈枢 稻葉文貞 (稻葉筆)

(8ウ)

(この間、脱缺)

六月十七日

一 傷寒論自十二至十三森養竹

(森筆)

六月廿一日

一 靈枢 稻葉文貞

一金匱 佐藤元長

(稻葉筆) (9才)

六月廿二日

一 難経 橘宗俊

(橘筆)

六月廿六日

一 靈枢 稻葉文貞

元長不快闕席

(稻葉筆) (9ウ)

六月廿七日

一 傷寒論自十四至十五森養竹

(森筆)

七月朔日

一 靈枢 稻葉文貞

一金匱要略 佐藤元長

(佐藤筆) (10才)

七月二日

一 難経 橘宗俊

養竹儀主人病氣二付石州路迄罷越候趣御届有之

(橘筆)

七月二日森養真講書被仰付、今村了庵同断 (佐藤筆) (10ウ)

二、資料の同定

1、医学館における別会講義について

本資料は、江戸幕府の医学館における別会講義のときに、担当の講師が記した起止簿『躋寿館出席留』のうち、慶応二年(一八六六)の上半期にあたる分の零葉である。以下その同定の理由を記す。

資料自体に医学館を示す記載はないが、講師名から医学館の講義を連想することは、困難ではない。<sup>注4</sup>講師・講義対象書籍は次の通りである。

森養竹<sup>注5</sup>—傷寒論、稻葉文貞—靈枢、具玄節—難経、佐藤元長—金匱要略、橘宗俊—難経。ほかに森養真と今村了庵が七月二日付けで新規加入した<sup>注6</sup>。

医学館における講座に二種類あり、一つは医官から選出された医学館世話役(教諭)・世話役手伝(助教)・講師による、無役の幕府医官及び医官子弟を対象とする講座で、月の三・八、四・九、五・十の日に開講した。別に天保度の制度改革<sup>注7</sup>により増設された、陪臣(藩医)・町医から選出された講師による陪臣(藩医)・町医を対象とする講座があ

り、月の一・六、二・七の日に開講し、これを別会と称した。本資料は一・二・六・七の日の記録のみであることから、別会の記録であることがわかる。

## 2、年代の特定

年代の特定には、川瀬一馬〔節見医師  
講義録〕『躋寿館出席留』、「森立之・約之父子」(『日本書誌学之研究』講談社、一九七二)が参考になる。森立之たつゆきの蔵書は、没後(一八八五)、男約之のりゆき(一八七一没)の妻陽の実兄大槻文彦を経て、その没後(一九二八)、安田文庫に帰した(現存未詳)。

川瀬はこの豊富な資料によって右を執筆し、『躋寿館出席留』については、「天保十三年八月の記録始めから慶応四年六月に至る分を、森立之が取捨して綴ぢ纏めたものが一冊(今四冊に改め分つ)ある。」「弘化三年正月から以後最終前年の慶応三年に至るまでの間は、(中略)立之が己が手に収めて後、残存していた各年度の巻頭、並びに自ら必要と認めた記事のある丁とを採択して、之を合綴保存したものである。」(五一六〜七頁)と記している。例年、医学館の開講は正月二十三日に定例化していたので、正月二十六日から始まる本資料は、某年の開講部分の記録を森立之が保存した残りの、破棄転用された部分に当たるものである。

森立之については、「慶応二年(六十歳)の秋には祇役の為福山に帰還した。七月二日雨中暁発し」(八〇一頁)とあり、前掲翻刻の最終日の

記事と合致する。また、森約之・今村了庵の講師拜命時期も、別の記録によって慶応二年七月のことと知られる(国立公文書館『医学館帳』)。以上から、本資料は『躋寿館出席留』の慶応二年の記録の一部であることがわかる。この年、各講師の年齢は次の通りである。森立之(二六〇)・稲葉文貞(四二)・梶玄節(五二)・没・佐藤元長(四九)・橘宗俊(?)・森約之(三二)・今村了庵(五三)。

## 3、旧蔵者について

蔵書印「南通馮氏景岫樓蔵書」「馮雄」から、本資料が馮雄(一九〇〇〜六八)の旧蔵書であることがわかる。馮雄については鄭偉章『文献家通考(清—現代)』(中華書局、一九九九)に記事が見え、「將蔵書全部捐贈上海合衆図書館」(一六六七頁)とある一方、馮雄旧蔵書が北京図書館に伝存するとの報告があり(真柳誠「北京図書館蔵、多紀元堅ら手沢の古医書」『漢方の臨床』四五巻、一二五八〜六〇頁、一三八六〜八八頁、一九九八)、真柳報告の二書がともに森立之旧蔵書であることから、馮雄が森蔵書を複数購入したことが知られる。その購入時期や経緯、馮雄蔵書については、後考を期したい。

## 三、考察

### 1、裏面に貼付された明藩府本『漢書』零葉

川瀬は「一二葉、つつ拾綴残存してゐる各年度の分は、もとは全年分揃つてゐたのを、後に立之が自己の雑記染筆の料に窮して、一少部分を標本的に保存し、他の大部分を裏返して使用してしまつたものである。」(五一七頁)とも記す。では、本零葉の裏面は何のために使用されてい

るであろうか。明版零葉の裏打ち紙として使用されているのである。

零葉は、明・徳藩最楽軒刊の『前漢書』列伝第四十三（韋賢伝）の第二・三・四・五・六・九・十・十二の計八葉である。每半葉一〇行、行二一字、有界、白口、単黒魚尾。匡郭内H一九七×W一三三（第二丁）。本来、左右双辺<sup>注</sup>だが、八葉とも左右下辺部分が裁断されており、双辺は確認できない。版心「徳藩最楽軒 前漢伝四十三 二（三・四・五・六・九・十・十二） 莊慶（三・六・九・四・五・十・十二は莊意）」。

また各丁に返り点・送り仮名・書眉書き入れがあり、日本に以前から伝わった本と見られる。加筆者は未詳。

各葉左端（明版紙面の外側、躋寿館出席留の裏面）に森立之の朱筆による丁付けがある。順に「伝四十三 二 十八」「三 十九」「四 廿」「五 廿一」「六 廿二」「九 廿三」「十 廿四」「十二 廿五」。

二、三、十二は版心丁付けと一致している。十八、二十五は通し番号である。よって、森が入手した明版『前漢書』零葉は、もと二五葉で、列伝第四十三の前に一七葉あったと考えられる。表（医学講習会日程）裏（漢書）の対応関係は、一―一二、二―一〇、三―九、四―六、五―五、六―四、七―三、八―二となり、表九・一〇の裏はない。

静嘉堂文庫所蔵の完本<sup>注</sup>。（一〇〇巻二四冊、一〇一函三四架）と比較したところ、同版であるが（匡郭内H一九七×W一三四、書型H三二二×W一八〇）、静嘉堂本が全体的に字様鋭利で、本零葉の方が後印。かつ二丁表第六行「懼」（静嘉堂本「屑」、上海図書館本「・」）、六丁表六行「藩」（静嘉堂本は墨丁）のごとき、あきらかな後修部分が確認

できる。（図版2）

左右下辺の裁断の理由や零葉となった理由など、未詳な点は多いが、森立之が本零葉を版本資料として保存しようとしたものであることは認められようし、この版本が明治以前に日本に伝来していることの証左とはなる。

## 2、医学館における講義―森立之自筆稿本『傷寒論攷注』

本資料が記録する医学館の講義を、さらに具体的に知ることができる資料がある。森立之自筆稿本『傷寒論攷注』（原本国立国会図書館所蔵、オリエント出版一九八六影印刊「漢方原典攷注集」）である。自筆稿本に書き入れられた詳細な日付によって、同書成立の過程が知られる。元治元年（一八六四）十一月二十二日の「辨脉法第一」（攷注卷二）写りに始まり、慶応四年（一八六八）二月十八日の「辨陰陽易差後労復脈証并治第十四」（攷注卷三十）の稿了にいたり、一応の脱稿をみた。三十巻末の跋語<sup>注</sup>から、幕府瓦解直前まで立之が心血を注いだ著作であったことが知られる。

跋語に言う慶応元年四月「起業」にあたる日付は、「論（張仲景自序）」（攷注卷一）の部分に記された（慶応元年）四月二十二日・四月二十七日・五月二日である。これは「論」を立之が三回に分けて講読したことを示す。以下、「辨少陰病証并治第十一」末（攷注卷二十五）の（慶応四年）二月七日を最終とするまで、日付はすべて二・七の日である。本資料（慶応二年一月〜七月）もこの執筆時期に含まれるので、この部分を対照すると、日付と講義箇所がほぼ完全に一致する。

先に小曾戸洋「森立之—その家系・略歴・著述」(『漢方原典攷注集 8』所収)があり、『傷寒論攷注』の成立についても委曲を尽しているが、今回の上海図書館資料の出現によって、『傷寒論攷注』に記された日付が、医学館の別会において森が実際に講義した日付をかなり正確に記入したものであることが確認された。これによって、慶応元年37回、同二年22回、同三年30回、同四年2回と、足かけ四年、計91回の講義記録が確認され、最末期の医学館における講義実施のさまが知られるわけである<sup>注11</sup>。

## 二、復旦大学図書館(二〇〇四年九月四日調査)

復旦大学図書館では古活字本『医学正伝』<sup>注12</sup>と日本鈔本『黄帝内経太素』を閲覧した。順にその書誌を示し、あわせて私見を述べる。

### A、『医学正伝』

#### 一、『医学正伝』刻本について

『医学正伝』は、明・虞搏(一四三八?)花溪の人、字は天民、号は恒德老人)が正徳十一年(一五二五)、七十八歳の時に編んだ医学全書で、中国・朝鮮・日本においてたびたび刊行された<sup>注13</sup>。日本の古活字印本は(注11のⅢ①)⑩、巻一のみ単行したいわゆる「医学或問」を除いて、一二行二〇字、または一一行二〇字であり、この版式は朝鮮本に近い。元和八年(一六二二)以降の整版本にいたって、一三行二四字、または一四行二四字が現れ、これは明万曆「京板校正大字医学正伝」の覆刻で

あると考えられる。ただし、整版本でも巻一のみ単行の「医学或問」(叢書「医家七部書」所収本や龍頭注本)はこの限りではない。

#### 二、復旦大学図書館本の書誌

所見本(以下、復旦本)は、カードに「(一六四)新編医学正伝八卷(明)虞搏撰 日本慶長九年(一六〇四)活字印本 八冊(一函)三八二三八九—九六 九三—五二五三」とあるもの。本書は、従来、国内に伝本が知られておらず、先に王宝平『中国館蔵和刻本漢籍書目』に著録されたが、いまだ詳細な報告がなされていないので、その書誌を示しておこう。

#### (図版3)

新編医学正伝八卷 明虞搏撰 虞守愚校 明嘉靖十年跋同三十二年重校 慶長九年京都曲直瀬玄朔跋古活字印本 全八冊

单辺、H二二九×W一六五、無界、一一行二〇字、双花魚尾、上下黒口。版心、書名卷数丁数(医学正伝 一一)。

首「医学正伝卷之一/序 /目録 或問/中風 傷寒」(略目)(全一

丁)丁裏余白有全卷目次墨筆書入、次正徳十年虞搏「医学正伝序」末曰「皆正徳乙亥正月之望花溪恒德老人虞搏序」(全三丁、八行一五字)、次

「凡例」(全二丁)、次「医学正伝卷之一目録/医学或問凡五十一条 ○中風門第一 ○傷寒門第二」(全二丁)、次「新編医学正伝卷之一/花溪

恒德老人虞搏天民編集/姪孫虞守愚惟明校正/医学或問凡五十一条」(全九二丁)。以下巻二(全一〇二丁)、巻三(全八九丁)、巻四(全八六丁)、

巻五(全九〇丁)、巻六(全九八丁)、巻七(全七八丁)、巻八(全七一丁)。各巻前有「略目」「目録」。次嘉靖十年史梧「医学正伝後再叙」末曰「嘉

靖辛卯仲春之吉莆田史梧識」又曰「嘉靖癸丑夏月日重校改誤」(巻八第七一裏、七二丁)、次曲直瀬玄朔(跋)末曰「慶長九年龍集甲辰秋九月望日延寿玄朔」(巻八第七三丁、木版)。印記「真州吳氏/有福読/書堂藏書」<sup>注14</sup>(各冊首)、「復旦大学/図書館蔵」(各冊・各巻首)。書入有朱引、返点、送仮名。

### 三、復旦本による新発見

#### 1、研医会図書館所蔵本との比較

その後の調査により、東京銀座の研医会図書館に復旦本と同版本(以下、研医会A本)の存在が確認された。元和二(一六一六)刊?冊五(巻二一六)、『研医会図書館蔵書目録第三輯上巻』十一頁)と著録するものである。この元和二年の同定は、川瀬一馬によるものと考えられる。すなわち『増補古活字版の研究』七五六頁に次のようにある。

「医学正伝」(元和二年六条鏤版)の古活字版については上に述べたから重ねて詳述しない。中島仁之助氏旧蔵の巻二至六の五冊は巻末を缺くが、この種の伝本であらう。研医会図書館に現蔵する。

川瀬の推定的言及が目録記載「?」となったものである。川瀬の言う「元和二年六条鏤版」がいかなる本を指すか明確でないのが遺憾であるが、復旦本と研医会A本は管見のかぎり異植字箇所もなく全くの同版であった。これにより、研医会A本を「新編医学正伝八巻 明虞撰撰 慶長九年(一六〇四) 京都曲直瀬玄朔跋古活字印本」(注11—III④)の残本と同定することができる。

仔細に比較すると、たとえば巻二第一丁四行「瘟疫三

附大頭天行病  
編纂

」の「蝦

蟊蠹」箇所が研医会A本は前行と揃っているのに対して、復旦本は若干下方にずれているといった異同がある。全体として研医会A本のほうがやや早印の印象をうける。

なお、研医会には別に古活字本『医学正伝』残六冊(缺一、六)を蔵する(注11—III⑩、以下研医会B本、目録未収か)。本書は、有界双辺の点で復旦本・研医会A本と版式を異にするが、一一行二〇字の点では有界双辺の他の版(注11—III①③⑤⑥、一二行二〇字)ではなく復旦本・研医会A本に同じい。しかも、右掲の巻二第一丁四行目「瘟疫」のごとき陰刻部分は復旦本・研医会A本同じ活字を使用しているように見える。同六行目「順」のごとき、同じ活字の早印・後印の関係にあるのではないかと見られる箇所も散見する。このことから、復旦本・研医会A本と研医会B本の刊行時期は、研医会B本が早いと推定される。(図版4)

#### 2、曲直瀬玄朔の跋

研医会本は首尾を欠くので、復旦本の跋文は従来知られていなかったものである(ただし、後掲の慶長十二年版の跋刊記に同文の翻刻がある)。ここに紹介しておこう。(図版5)

医学正伝者、恒徳老人、承丹溪先生之遺流而「述作之書也。一谿翁信之貴之。故予為門下」生講読之。字画繆語、檢諸書正之。文簡「漏脱、鑑数部補之。猶差多闕失。後來好生」之士改革之、幸甚也。「慶長九年龍集甲辰秋九月望日 延寿玄朔「玄/朔」

(訓読—『医学正伝』は、恒徳老人(※虞撰)、丹溪先生(※朱震亨)の遺流を承けて述作するの書なり。一谿翁(※初代曲直瀬道三)、これ



を信じこれを貴ぶ。故に予、門下生の為にこれを講読す。字画の謬誤は諸書に検してこれを正し、文簡の漏脱は数部に鑑みてこれを補ふ。猶ほ羞づらくは闕失多からんことを。後來、好生の士、これを改革すれば、幸甚なり。」

別掲(注11—III)のように曲直瀬玄朔の跋・刊記は多くの版に付されておられ、それぞれ異同があるので、あわせて掲出しておこう。

慶長十年下村生蔵活字印本(注11—III⑤)には次の跋があることが報告されている<sup>注16</sup>。

医学正伝之行世者、年代稍久也。大明朝鮮之印本、「文簡字画差謬惟夥矣。先是」本朝亦雖刊行、不能悉釐正。今吾門下医生松印軒「玄忠居士、檢数帙加訂考、重鏤諸梓。寔可謂医」流之至宝。仍書之以為証云。」慶長八年歳舎癸卯仲秋初吉 延寿院法印玄朔

(訓読—『医学正伝』の世に行はるること、年代稍や久し。大明・朝鮮の印本、文簡字画の差謬惟れ夥し。是より先、本朝も亦た刊行すると雖も、悉くは釐正すること能はず。今、吾が門下の医生松印軒玄忠居士、数帙を檢して訂考を加へ、重ねてこれを梓に鏤む。寔に医流の至宝と謂ふべし。仍てこれを書して以て証と為すと云ふ。)

これによって、慶長八年当時、明版・朝鮮版がともに日本に入っていたことがわかる。本朝の刊行とは、一応、慶長二年小瀬甫庵印本(注11—III①)のことと想定してよいであろう。松印軒(斎藤)玄忠の子が、

医徳堂守三(吉田意安宗恂門、注11—III②⑦の刊行者)であり、慶長年間、明・呉昆『医方考』(一六〇四刊)、明・劉純『玉機微義』(一六〇五刊)を刊行した。彫刻に関与した下村生蔵の存在も知られている。『玉機微義』は、『医学正伝』とともに玄朔の義父初代道三が重視した書である。

慶長十二年活字印本(注11—III⑥)の曲直瀬玄朔跋は、前掲の復旦本と同文で、さらに「慶長十二年丁未孟夏上浣開板功畢」という刊記を加えている。両跋は字様も非常に似通っており、さきに慶長九年に印行した際の跋(木版)を覆刻したものと考えられる。<sup>注16</sup>  
元和八年の整版本(注11—III⑪⑫)には次の跋がある。

右全部八卷、二十餘年閱之、深悟当流」專要、而即加筆。誠末学之筌蹄者也。 永禄十二年閏五月十日 雖知苦慮道三  
医学正伝者、当門流至宝之書也。予以」此一部加倭訓朱点、為学徒講説畢。 慶長第九季秋上浣 延寿院 玄朔

(訓読—右全部八卷、二十餘年これを閲して、深く当流の專要を悟りて、即ち筆を加ふ。誠に末学の筌蹄なるものなり。  
医学正伝は、当門流至宝の書なり。予、此の一部を以て倭訓朱点を加へ、学徒の為に講説し畢んぬ。)

以上の跋にみるかぎり、曲直瀬玄朔の『医学正伝』校訂出版は慶長八年(一六〇三・〇四)に集中していることが知られる。このことがどういう意味を持つのか、徳川開幕期の曲直瀬玄朔の活動とあわせて、さ

らに追及していく必要があると考えている。

曲直瀬流に代表される後世方医学は、玄朔およびその門人らによる多数の医書（明医学書の翻刻と自著）の出版を通して江戸前期の日本に定着した、といえる。とりわけ、整版以前の古活字本では、医書の占める割合と出版事業における医者の関与の高さが夙に知られている<sup>注17</sup>。では、玄朔らがテキスト校訂の上でどのように関与したか、医書の講義とテキストの出版がどのような関係にあったか、といった問題が浮上する。

出版のつど活字を組みなおして印刷したはずの活字本では、そのたびに活字（或いは文字）の異同を生ずるが、『医学正伝』の例が示すように、附された跋文から考えれば、その異同は校訂作業を反映している可能性がある。ただし、校訂作業の結果か、植字者の過失かの判断は容易ではないであろう。この点で、入木による修訂によって情報を蓄積することが容易な製版とは違った問題点が、古活字本にはあるといえよう。また、白文を基本とする活字本には、返り点・送り仮名が書き入れられることが多い。こうしたテキストの異同や書き入れの問題、および整版本のテキスト・返り点・送り仮名との比較をとおして、古活字本テキストを具体的に検証する必要性を感じる次第である。その際に、曲直瀬玄朔の『医学正伝』校訂作業が実際にどの程度行われたのかを検討する材料として、復旦本・研医会A本と研医会B本（および栗田文庫本・杏雨書屋本）は格好の資料となりうると考えるものである。

## B、『黄帝内経太素』

『黄帝内経太素』（以下『太素』）は、唐・楊上善奉勅撰による『黄帝内経』の註解書で、現伝の「素問」「靈樞」と異本関係にあり、かつ京都仁和寺に日本古鈔本の残る佚存書であって、素・靈が北宋以後の校正・印刷を経た本文しか伝わらないのに対し、よく古態本文を残していることとで、著名である。

復旦大学所蔵本は、江戸幕府医官坂春璋<sup>注18</sup>による、同じく医官小島宝素の架蔵本からの、天保八十年（一八三七〜三九）にかけての重鈔本である。全三十巻のうち、江戸後期当時伝存した巻一・四・七・十六・十八・二十・二十一を除く二十三巻が完存し、鈔写経緯の明瞭な善本である。坂春璋の奥書をもつ『太素』鈔本は国内にも伝本<sup>注19</sup>が知られるが、本書がその祖本であると考えられる。（図版6）

坂春璋による鈔写年月日は次の通りで、必ずしも巻次に従って鈔写しておらず、特に巻二・三・五・六が遅れて鈔写されていることがわかるが、その理由は未詳。

- 天保八年（坂春璋六十三歳）――10／2巻八、10／4巻九、10／24巻十、11／3巻十一、11／6巻十二、11／7巻十一校、12／6巻十五、12／8巻十五校、12／15巻十四、12／18巻十七
- 天保九年（坂春璋六十四歳）――正／5巻十九、正／8巻十七校・廿三、正／23巻廿四、2／6巻廿五、2／10巻廿六、2／25巻廿七、3／2巻廿八、3／5巻廿九、3／6巻廿八校、3／7巻廿九校、3／26巻廿二、3／27巻廿二校、3／29巻卅、4／1巻卅校、4

／11巻十三

天保十年(坂春璋六十五歳)―2/20卷二、2/23卷三、2/26卷

五、2/26卷六、3/3卷六校、3/4卷二・三校<sup>注20</sup>

小島宝素所蔵鈔本からの重鈔であることは卷九末の識語にみえ、卷五末には小島の識語を併記している。小島宝素所蔵鈔は、明治一〇年代楊守敬に購求され、台湾・故宮博物院に現存する<sup>注21</sup>。その識語によつて、小島宝素がほぼ文政十三年(天保元年)から天保二年にかけて、尾張藩医浅井正翼から入手したものであることを知る。その後、小島宝素は天保十三年に京都に行き、福井崇蘭館と仁和寺で原本を閲覧した際、杉本望雲に鈔写本を作らせたらしいが<sup>注22</sup>、それ以前は江戸には浅井正翼所蔵鈔本からの重鈔しか知られていなかったと考えられる。浅井本の鈔写者は、浅井氏門人の医者塚原修節であり、故宮本に見る限り訓点再現されておらず、その重鈔である本書にもない。

本書は、明治期に中国にわたつたらしく、印記・書入れ<sup>注23</sup>から、光緒二十三年(一八九七)に武林の書肆子泉氏から郵県の陳隆沢(求志居・翰香家塾)が入手したことや、王懿栄(一八四五―一九〇〇)・徐乃昌(一八六六―一九四六)が所蔵<sup>注24</sup>したことが知られるが、流伝の経路はなお考えるべきである。朱筆で蠹蝕箇所を『素問』によつて校補したり、対応する『素問』『靈枢』『甲乙経』の篇名を注記したりしているのは、概ね書肆子泉と陳隆沢によると見られる。

また、卷二表紙に『経籍訪古志』の解題を鈔出しており、卷三十末の識語にも同書への言及があり、同書刊行による日本伝存の善本漢籍・佚存漢籍の情報が、衝撃をもつて清末の読書界に受け止められたことを知

る。

### 三、浙江図書館(二〇〇四年九月七日調査)

浙江図書館では、小島宝素手沢『儒門事親』(和刻本)・楊守敬旧蔵『和名類聚鈔』<sup>注25</sup>・幕府医官高島氏旧蔵『赤水玄珠』(和刻本)ほかを閲覧した。館蔵の日本書については、カード目録のほか、『浙江図書館古籍善本書目』(浙江図書館古籍部編、浙江教育出版社、二〇〇二)に「日本、朝鮮、越南刻漢文古籍善本書目」が付録されており、日本書一七五点が収録されている(八七八―八九二頁)。しかしなお、これにもれた日本書も少なくなく、これについても既に同館員による調査が行われて、仮目録が作成されていた。

#### 小島宝素手沢『儒門事親』

##### 一、『儒門事親』について

『儒門事親』は、金・張從正(一一五六―一二二八)撰にかかり、もと三卷であったものが、門人麻知幾・常仲明等編集にかかる他の著作等とあわせて叢書として刊行され(金刊本が静嘉堂文庫に伝存)、のち明代に叢書全体を『儒門事親』と題して十五巻として刊行されるにいたつた。

十五巻本には、さきに嘉靖二十年(一五四一)邵輔刊本があり、後に若干改変して万曆二十九年序刊(一六〇一)吳勉学編『古今医統正脈全書』に収められ、後者が広く流布した。小島宝素手沢の和刻本(以下、浙江本)の底本も『医統正脈』所収本である。和刻本は正徳元年(一七一一)

渡辺栄序刊本の一版のみで、「浪華書肆田縁叔平藏版」（卷十五末）と入木した後印がある。<sup>注26</sup>

## 二、浙江本『儒門事親』の書誌

浙江本（浙江図書館善本 甲 登記号：〇一〇七〇〇）（図版7）は、比較的早印とみられる良好な印面であるが、ここではその版式・体裁<sup>注27</sup>は注記するにとどめ、浙江本の本色といえる小島宝素の書入れに絞って言及したい。書入れは、次の三種に大別できる。A—本書の解題の転写、B—鈔補、C—別本との校勘。Bは、底本の脱缺によるものではなく、別本との校読作業によって補ったものであるから、Cの一部とみなすこともできる。

Aは次の二種である。①封面裏に、四庫全書総目提要の当該箇所を筆写し、末に日時を記す。「文政三年<sup>注28</sup> 庚寅閏三月与諸子同校斯書三卷、并録乾隆四庫提要如左 円齋後人小島質於宝素堂中」。三巻とは、先に述べた原『儒門事親』にあたる。②後序の余白に、「多紀元簡『医贖』（文化六年序刊）上の『儒門事親』に関する筆記<sup>注29</sup>を筆写する。

Bは、①目録一二丁の次に「又十二」一丁を多紀元簡校嘉靖版によって補う。②卷十首の前に図三丁を『医方類聚』によって補う。③卷十四二丁の次に一丁を『医方類聚』によって補う。④卷十五末に「先生辞世詩一首、又絶句四首」一丁を補う<sup>注30</sup>。⑤辞世詩の次に「儒門事親後序 跋（嘉靖十九年閏忠）」一丁を補う<sup>注31</sup>。（図版8）

Cは全巻にわたり稠密を極める。校勘終了時の識語に次のものがある（前記A①を除く）。

①「天保二年辛卯三月十七日据挿嘉靖刊本校勘、併照劉櫟窓手校嘉靖本審校、癸巳八月十日据多紀元昫医方類聚參攷本校訂文字 質記」（卷十五末）。

②「天保四年八月十日<sup>マ</sup>林劉桂山先生嘉靖本対校本於其孫曉湖元昫、補詩五首跋一篇併及劉君跋語 質」（後序末）。

③「此本係一部叢書、後人不知題為儒門事親、今拋先君子之言、徵之紺珠經及医方類聚所輯、詳其篇目、以加改訂、而焦氏經籍志所載、張氏経験方、与三復指迷者、不在乎此篇内、惜乎其佚亡、丙子清和月、識于桐竹雙清処元胤「聿修堂藏本、鉛槧滿帙、皆櫟窓先生、及其子君孫手校也、卷四以下每卷改訂篇目者、実為柳泚子手沢、今据改訂併記柳泚跋語於斯、而諗後之讀是書者、俟宋居士質誌于宝素南樓、時秋雨蕭々、八月十日」（裏表紙見返し）。

## 三、浙江本の関連資料

上記の小島宝素の校勘作業をさらに具体的に跡付ける上で、不可欠の資料を次に掲げたい。

1 『太医張子和先生儒門事親』三卷一冊（台湾故宮博物院所蔵・楊守敬旧蔵）——小島宝素扱江戸扱元版鈔本影鈔本<sup>注32</sup>（図版9）

本書は、写了後の校合時の識語<sup>注33</sup>から、小島宝素が多紀氏所蔵鈔本から重鈔したものである。浙江本一〜三巻の影元鈔本・嘉靖版との校勘が文政十三年閏三月（十二月十日天保改元）であり、翌天保二年十月には友人奈須菊庵が協力して本書と多紀氏原鈔本との校合をしているので、

本書の鈔写時期は、天保元〜二年のことであろう。

小島が重鈔した多紀氏鈔本<sup>注34</sup>は、国立公文書館に現存している(三〇〇函二二一架、医学館旧蔵本)。これは、多紀元簡が京都の医家伊良子氏千之堂所蔵の元刊本(以下、伊良子本)といわれるものによつて鈔写したものと考えられるが、現在、伊良子本の存否は未詳(佚亡?)。後の楊守敬編『留眞譜初編』所収も同書の版式を記したものである。ただし、『書目五編』(台湾・広文書局、一九七二、書影七五九頁)所収本にある「十一行二十七字」(三〇頁)の記載は不正確で、多紀・小島両氏鈔本によつてみれば行二三〜二十七字と不同(全体的には二五字内外)。はじめ、これを鈔写の疎略によるものかと考えたが、この体裁は前述の静嘉堂文庫所蔵金刊本に同じよう、むしろ存否未詳の伊良子本の体裁を伝えるものと考えられる。ここで想起されるのが、小島宝素がのち天保十三年に京都の伊良子氏を訪ね、原本を閲覽したときの記録である。

○ 元版儒門事親三卷 審是金版、不似元槧円潤者、而自有宋末

刊本之態為証<sup>注35</sup>

宝素はこれを金版と鑑定しているのである。ただし、本書には(元)中統年間の高鳴序、および昭陽單陽月晦日の頤齋引が付されており、台湾故宮鈔本には「昭陽單闕」を金滅亡後九年と同定する宝素の按語<sup>注36</sup>が記されているので、伊良子氏原本の印刷時期が元・中統以降であることを、宝素は十分に承知している。そのうえで金版と鑑定しているのは、版式・字様の点から、元代新刻とは考えられず、宋末(金)刊本の元代印本であると言わんとするのであろう。宝素の古版鑑識眼の面目躍如た

る記述である。多紀・小島両氏鈔本と静嘉堂刻本との精査の結果については改めて報告したい。

なお巻二一八丁表九〜十一行から裏一〜三行にかけて、伊良子本に缺があつたらしく、多紀氏鈔本は空白、小島鈔本は嘉靖本による朱筆鈔補がある。

2 『儒門事親』存十三卷五冊缺卷一・二(台湾故宮博物院所蔵・楊守敬旧蔵)―明嘉靖二十年邵氏介后齋刊<sup>注37</sup>(図版10)

本書は小島宝素旧蔵にかかり、巻四から巻十にかけて文政十三年閏三月初めから四月終わりにいたる校勘時の識語<sup>注38</sup>がある。

校勘に用いた資料は、多紀氏所蔵の嘉靖版『儒門事親』、および『医方類聚』であつた。嘉靖版は、多紀元簡・元胤らによる校勘の書入れが縦横になされ、宝素の校勘作業もこれに拠るところが大きかつた本であるが、伝存未詳。既述のとおり、浙江本はこの多紀氏の校勘をよく吸収していると考えられる。

『医方類聚』<sup>注39</sup>は、十五世紀半ばに朝鮮で編纂された全二六六巻に及ぶ大部な医学全書で、一四七七年に三十部刊行された朝鮮活字本のうちの一本と考えられるものが孤本として日本に伝存し(現存二五〇巻二五二冊)、天明四年に吉田篁墩の仲介により仙台の工藤平助から多紀元簡が購入した(宮内庁書陵部現蔵)。十五世紀当時、朝鮮に存在した医書を集成編纂した書物であるので、多くの佚書・古態本文を含み、輯佚・校勘資料として有効である。このことに気づいた多紀元簡の指示により、男元胤・元堅は早くから輯佚作業に従事し、「医方類聚採輯本」を編集した。

のちに幕末に幕府医官喜多村直寛が、幕府の援助をうけて十年をかけて（嘉永五年1852四月～文久元年1861二月）、木活字印行した（学訓堂聚珍版）。校訂実務者の洪江抽斎（一八〇五～五八）は、業半ばにして没した。宝素が校勘に従事した天保期には未刊で、貴重な原本の借り出しは困難であつたらしく、「多紀元昫医方類聚参攷本」<sup>注40</sup> によつて校勘している。

#### 四、小島宝素の『儒門事親』本文校勘の足跡

以上から、小島宝素による『儒門事親』本文校勘の軌跡を整理すると次のようになる。

文政十三年（天保元年）

閏三月、この月、（架蔵嘉靖版が巻一・二を欠いたため）和刻本巻一～三を、多紀氏校嘉靖版（および影元鈔本？）によつて校勘。

閏三月三日、架蔵嘉靖版巻四を、多紀氏校嘉靖版によつて校勘。

閏三月二十四日、架蔵嘉靖版巻五を、多紀氏校嘉靖版によつて校勘。

四月二十七日、架蔵嘉靖版巻七を、多紀氏校嘉靖版によつて校勘。

七月四日、架蔵嘉靖版巻十を、多紀氏校嘉靖版によつて校勘。

天保二年

三月十七日、和刻本巻四～十五を、架蔵嘉靖版により校勘し、あわせて多紀氏校嘉靖版を参照。

十月二十一日、多紀氏所蔵影元鈔本からの重鈔本を、多紀氏原鈔本により校合。

天保四年

八月十日、和刻本を、多紀元昫医方類聚参攷本により校勘。また和刻本巻末に、多紀氏校嘉靖版により「先生辞世詩一首、又絶句四首」、および「嘉靖十九年閏忠儒門事親後序 跋」を鈔補。

つまり、和刻本巻一～三を、多紀氏校嘉靖版（および影元鈔本？）によつて校勘し、ついで架蔵嘉靖版巻四以下を多紀氏校嘉靖版によつて校勘し、その架蔵嘉靖版巻四以下によつて和刻本巻四～十五を校勘し、さらに多紀元昫医方類聚参攷本によつて和刻本全体を校勘した、ということになる。よつて、浙江本は版本としてはさほど貴重とはいえないが、影元鈔本・多紀氏校嘉靖版・医方類聚参攷本を用いた小島宝素の校勘を最もよく反映しており、『儒門事親』の本文研究の点で貴重な資料であるといえる。

#### 結語

以上、今回の調査によつて見出した資料の紹介を試みた。筆者の直接的な関心―すなわち江戸時代における医学文献の研究―に即せば、ここにあげた資料は江戸初期の曲直瀬玄朔が関与した古活字本に始まり、文政・天保のころの小島宝素にかかわる古鈔・版本の調査と本文研究をへて、慶応中の森立之による『傷寒論』の講義にいたる、といささか乱暴ながら、そう要約することができる。得られた新知見で言うならば、①国内に完本の存在しない貴重書（古活字本『医学正伝』）が見出され、その調査の結果、国内の同版本の書誌事項を訂正することができた。②

また、幕府医学館の記録文書の一部が発見され（『医学講習会日程』）、これによって医学館最末期の講義のようす、特に森立之の『傷寒論』講義について詳しく知ることができた。③浙江図書館の小島宝素手沢『儒門事親』は、多紀氏歴代と小島宝素による数次の校勘を集約した同書の本文研究上、重要な資料であることが判明した。

他方、上記資料の持つ意義について見定めるべく関連資料の調査を重ねるなかで、さまざまな問題点が浮上してきた。古活字本と明版・朝鮮版との関係は改めて研究に着手すべき問題であると思われるし、明治以後の日中間における書籍の移動もまだまだ研究すべき余地がある問題である。すなわち、台湾故宫その他に所蔵する楊守敬藏書（小島宝素藏書をはじめとする日本書を多く含む）ほどの規模ではないまでも、小島宝素や森立之や多紀氏といった幕末の学者の手で発掘された資料が中国に渡って尊重され、中には版行印行されている例が少なくないという事実。さらには、仁和寺本『黄帝内経太素』のように、幕末には医学古典研究に大きく寄与した資料が、その後必ずしも十分な原典研究がなされてきていないのではないかと疑われる資料もあり、いずれも今後さらに追究すべき研究課題である。時間的制約もあり今回は資料紹介にとどまったが、今後、個々の研究をすすめていきたいと考えている。

注

1 研究者交流としては、上海・復旦大学に呉格教授（古籍整理研究所）を訪ねて（9/4）、十二月の日本招聘を協議するとともに（12/14〜20来日）、中国において我々のプロジェクトを発信する機会を求め、教授の提案により第四回中文献資源共建共享合作会議（南京図書館主催）に参加・報告した（11/14〜18）。

ついで杭州・浙江工商大学に王勇・王宝平両教授を訪ね（9/6〜9）、その後一松学舎大学・浙江工商大学間に学術交流に関する協定書が取り交わされた。

上海・華東師範大学では（9/10）大阪市立大学の21世紀COEプログラムが同大学内においている在外拠点「都市文化研究センター」（陳映芳教授）を視察した。

また華東師範大学図書館古籍部の呉平主任と面談し、同図書館に日本の漢文資料が多いとの情報を得た。呉平氏によればその数、約八〇〇点にのぼり、清末・盛宣懷の旧蔵書が多い。なお古医書については、上海中医学院（現上海中医葯大学）創設のときに、同校に移管されたことが知られている（目録あり）。

第四回中文献資源共建共享合作会議の模様については、鴛田潤（国立国会図書館アジア情報課）の出張報告（『国立国会図書館月報』五二八・二〇〇五年三月）、『アジア情報室通報』三一・二〇〇五年三月）、および拙稿（『雙松通訊』四号所収）を参照されたい。

2 漢籍・準漢籍・日本漢文の定義については、高山節也・高橋智・山本仁「漢籍目録編纂における準漢籍の扱いについて」（『汲古』四六、二〇〇四年二月）を参照のこと。

3 王勇教授（浙江工商大学）は、この種の本に「華刻本」の名称を提唱している。

4 安政版『医心方』（万延元年1850刊）に、校勘者として「医生森立之・会津医員佐藤長・園部医員泉興荒・出羽処士橘諸芳」の名が見え、泉興荒以外には医学館における講師を意味する「医学講書」の役名が記されている。

5 各講師の生卒・名号等と、医学館における経歴をここに記しておく。

森養竹(1805-1885、名立之、字立夫、号枳園、福山藩医、1848宋本備急千金方校正手伝、1854医学館講師—坂上玄丈の後任)

稻葉文貞(1821-?)、名元照、字用晦、福岡藩医、1847医学館講師—辻元松庵の後任)

泉玄節(1815-1866、名興元、字士善・居中、号星溪・構庵、園部藩医、1857医心方校正手伝、1863医学館講師)

佐藤元菴(1818-1897、名穎・菴、字賜菴、号応渠、1859医学館講師—渋江抽斎の後任、1863御目見)

橘宗俊(?!?)、本国出羽、名諸芳、号菊庭)

森養真(1835-1871、名約之、号礎庭、1863医学館校正手伝)

今村了庵(1814-1890、名亮、字祇卿、号敬業館、伊勢崎藩医、1864医学館校正手伝)

6 四月十日の泉玄節死去にともなう後任人事に、最終的に森約之・今村了庵の二名の講師採用となったのは、前年に浅田宗伯に講師の打診があったのを、病気を理由に辞退していたので、その両者の席を埋めることになったためである(国立公文書館『医学館帳』)。

7 はじめ天保十三年(1833)九月に、御目見医師中の希望者に聴講が許され(三・八、四・九の日、このうち三・八の日は病人調—臨床実習—も兼ねた)、同十四年(1833)十一月十五日には陪臣・町医の聴講が許され、翌十六日にその講座のための講師が陪臣・町医から選出され、十一月二十六日から講座が始まった(一・六、二・七の日)。

8 例えば『北京図書館古籍善本書目』(北京図書館、一九八七)に、「前漢書一百卷 漢班固撰 明德藩最業軒刻本 二十四冊 十行二十一字白口智左右双辺」と著録する。

9 島田重礼旧蔵、明治以後の舶載品であろう。印記「柳傳竹伴」「王業浩印」「島田氏雙桂楼收藏」。

10 「此書起業于慶応元乙丑年四月、今茲至戊辰二月、中間凡二年、退食刀圭奔走餘間、夜以繼日、遂得脱稿矣。余五十年來、精神之所專注、唯在此三十卷中。如其家說秘訣、其理玄妙幽微、蓋非其人則巨伝。仲景以後、以心伝心之至意久失其伝、注家皆就文字上而解說、但是昇堂而未入室之徒耳。今看破其偏陋、而帰於臨症実詣之地、則仲景之書可始説而可始施用于今日也。六十二翁立之再録」

11 森立之『傷寒論攷注』に記された講義日の記録は次の通りであり、今回新出の資料に該当する時期はゴシック部分である。

慶応元年 4/22 (卷一論、一七才)、27 (論、三四才)、5/2 (論、四八ウ)、7 (卷二辨脉法第一—三条)、17 (四—三三)、22 (一四—二二)、27 (二二—二六)、閏5月/2 (二七—三二)、22 (三三—三七)、6/2 (卷三平脉法第二—三)、7 (四—九)、12 (一〇—一六)、17 (一七—二二)、22 (二三—三二)、7/7 (7公休)、22 (三三—四五、卷四傷寒例第三—二二)、



27 (二)、8/2 (三、八)、7 (九、二二)、12 (二三、一四)、17 (二五、一六)、22 (二七、二〇)、27 (二二、三三)、9/2 (卷五辨瘧濕喝脈証第四、卷六辨太陽病脈証并治上第五一、五)、7 (六、八)、12 (九、二二)、17 (二三、一六)、22 (二七、二二)、27 (三三、二六)、10/12 (二七、三〇、卷七辨太陽病脈証并治中第六一、四)、17 (五、八)、11/2 (九、一〇)、7 (一一、一五)、12 (二六、一八)、17 (二九、二〇、卷八二二)、27 (三二、二七)、12/2 (二八、三〇)、7 (三三、三三)、

慶応二年 正/27 (卷八辨太陽病脈証并治中三三、三六)、2/2 (卷九三七、三九)、12 (四〇、四四)、17 (四五、四八、卷一〇四九、五〇)、22 (五一、五五)、3/2 (五六、六四)、7 (六五、六七)、12 (六八、七二)、17 (七三、七六、卷一一七七)、27 (七八、八〇)、4/7 (八一、八六、卷一二八七)、27 (八八、九七)、5/7 (九八、一〇二)、17 (卷一三辨太陽病脈証并治下第七一、三三)、6/7 (四、一一)、17 (卷一四二二、三三)、27 (二四、一五)、(7/2 福山行)、10/17 (二六、一八)、22 (二九、二〇、卷一五二二)、11/7 (二二、二六)、17 (二七、二八、卷一六二九、三二)、27 (三三、三九)、

慶応三年 2/? (卷一七四〇、五〇)、3/7 (卷一八辨陽明病脈証并治第八一、一二)、12 (二三、一九)、17 (卷一九二〇、三三)、22 (二四、二八)、4/2 (二九、三〇)、7 (三二、三三)、(12) (三四)、22 (卷二〇三五、三七)、5/7 (三八、四二)、6/2 (四二、四六)、7 (四七、四九)、17 (五〇、五三)、27 (五四、六〇)、12 (卷二一六一、六二)、27 (六三、六八)、8/2 (六九、七三)、7 (七四、七六)、17 (七七、七九)、22

(卷二二辨少陽病脈証并治第九一、三三)、27 (四、五)、9/2 (辨太陰病脈証并治第十一、三三)、(7) (四、八)、17 (卷三三辨少陰病脈証并治第十一、三三)、10/7 (四、二〇)、17 (二二、三三)、27 (卷二四二四、二五)、11/7 (二六、三〇)、(12) (三一、三三)、12/7 (卷二五三四、三六)、慶応四年 正/27 (三七、三八)、2/7 (三九、四五)

12 別に「医学正伝八卷 (明) 虞搏撰 明万曆刊本 一六冊」が所蔵され、注13 にあげるI-⑦にあたる。

13 遺漏があることと思うが、先行研究を参考に諸本を示せば次のとおりである。ただし中国・朝鮮刊本に関しては和刻本以前のものに限り掲出した。

I 中国刊本

- ①明虞搏撰 (姪孫守愚校) 嘉靖十年(一五三二)刊 (伝存未詳)
- ②新編医経正宗八卷 明虞搏撰 方道明校 嘉靖十八年(一五三九)建安広勤書堂刊 (内閣文庫)、一三行二六字、有界、双边。
- ③明虞搏撰 (姪孫守愚重校) 嘉靖三十二年(一五五三) (伝存未詳)
- ④京板校正大字医学正伝八卷 明虞搏撰 姪孫守愚校 万曆五年(一五七七)金陵三山書舎松亭吳江刊、一三行二四字、有界、双边。
- ⑤京板校正大字医学正伝八卷 明虞搏撰 姪孫守愚校 万曆五年(一五七七)金陵三山書舎松亭吳江刊瀟城書林劉希信修(東大他)
- ⑥明虞搏撰 万曆五年(一五七七)金陵周氏光霽堂刊
- ⑦医学正伝八卷 明虞搏撰 陳心学詹偉孫天爵張吳等校 万曆六年(一五七八)邊有猷序重刊、九行二〇字、有界、双边。(復旦・研医学会)
- ⑧新編医学正伝八卷 明虞搏撰 万曆六年(一五七八)序長垣令邊氏刊(杏雨)

## II 朝鮮刊本

① 甲辰活字印本 (嘉靖四十三(一五六四)以前刊) 单辺、一二行二〇字(三木・大阪図)

② 抛甲辰活字印本刊 (天文十三年(一五四四)以前刊) 一二行二〇字(書陵部)

③ 万曆初期刊『攷事撮要』全州板

## III 日本刊本

① 新編医学正伝八卷 明虞搏撰 姪孫守愚校 慶長二年(一五九七) 京都小瀬南庵古活字印本。一二行二〇字、有界、双辺。(書陵部、大阪府図)

② 明虞搏撰 慶長八年(一六〇三) 京都医徳堂守三古活字印本(伝存未詳)

③ 新編医学正伝八卷 明虞搏撰 慶長八年(一六〇五) 曲直瀬玄朔跋京都下村生蔵古活字印本、一二行二〇字、有界、双辺。

④ 新編医学正伝八卷 明虞搏撰 慶長九年(一六〇四) 京都曲直瀬玄朔跋古活字印本、一一行二〇字、無界、单辺。

⑤ 新編医学正伝八卷 明虞搏撰 慶長八年曲直瀬玄朔跋慶長十年(一六〇五) 京都下村生蔵古活字印本、一二行二〇字、有界、双辺。(栗田文庫)

⑥ 新編医学正伝八卷 明虞搏撰 慶長九年曲直瀬玄朔跋慶長十二年(一六〇七) 古活字印本、一二行二〇字、有界、双辺。(杏雨)

⑦ 明虞搏撰 慶長八年医徳堂守三跋元和二年(一六一六) 古活字印本

⑧ 明虞搏撰 元和二年(一六一六) 六条鑲版古活字印本

⑨ 新編医学正伝卷之一 即医学或問 元和七年(一六二二) 京都梅寿古活字印本、一一行一九字、無界、双辺。

⑩ 新編医学正伝八卷 明虞搏撰 姪孫守愚校 古活字印本、一二行二〇字、有界、

## 双辺(研医)

⑪ 京板校正大字医学正伝八卷 明虞搏撰 姪孫守愚校 元和八年(一六二二) 京都村上平楽寺抛万曆五年金陵三山書肆松亭吳江刊本重刊、一三行二四字、無界、双辺。

⑫ 京板校正大字医学正伝八卷 明虞搏撰 姪孫守愚校 抛元和八年村上平楽寺刊本重刊、一三行二四字、無界、双辺。

⑬ 京板校正大字医学正伝八卷 明虞搏撰 姪孫守愚校 抛元和八年京都村上平楽寺刊本寛永十一年(一六三四) 重刊、一三行二四字、無界、双辺。

⑭ 新編医学正伝卷之一 即医学或問 明虞搏撰 姪孫守愚校 慶安元年(一六四八) 重刊、一二行二一字、無界、双辺。

⑮ 新編医学正伝八卷 明虞搏撰 姪孫守愚校 慶安二年(一六四九) 重刊、一〇行一八字、無界、单辺。

⑯ 京板校正大字医学正伝八卷 明虞搏撰 姪孫守愚校 明曆三年(一六五七) 瀧元敬訓点刊

⑰ 京板校正大字医学正伝八卷 明虞搏撰 姪孫守愚校 万治二年(一六五九) 抛万曆五年金陵三山書肆松亭吳江刊瀨城書林劉希信修本京都芳野屋權兵衛重刊、一四行二四字、無界、双辺。

⑱ 新編医学正伝卷之一 即医学或問 明虞搏撰 姪孫守愚校 天和二年(一六八二) 刊、九行一五字、無界、单辺、龍頭注本

⑲ 新編医学正伝卷之一 即医学或問 明虞搏撰 姪孫守愚校 元禄十三年(一七〇〇) 抛慶安元年重刊本京都吉野屋徳兵衛印、一二行二一字、無界、双辺。

14 吳引孫(一八四四?)、(一九〇四?)の蔵書印である『文献家通考』一一四

四〇四七頁参照)。なお第一冊吳氏藏印の下に墨書で「八本一函／四元八角」と吳氏購入時の価格かと思われる書入れがある。

15 栗田元次「古活字本に於ける「刊之」につきて」『書誌学』一一卷一号、一九三九・一。

16 多治比郁夫「杏雨書屋所蔵 古活字本目録」『杏雨』第4号、二〇〇一に、巻首・刊記の書影が載る(二五二頁)。

17 曲直瀬流医家による古活字本印刷に関しては、川瀬一馬『坊刻本の類古活字版の研究』中(A・B・A・J発行、一九六七)の「補訂篇 第六章 第一節 述に於ける医師の活動と医書の開版」(七四三〜七六二頁)参照。

18 坂春璋(一七七五〜一八五五)は、曾占春(本草家、薩摩藩医)に学び、最上徳内に従つて蝦夷・樺太踏査を行い(一七九二)、後年(一八一五頃)、幕府医官坂氏を継いだ。小林東鴻・坂丹邸の名でも知られる。

19 北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部に一本を蔵するほか、近年、古書市場にも現れた(井上書店古書資料目録)。

20 各巻末の識語(仁安中丹波頼基書写・保元中憲基移点の元奥書を除く)は次の通り。

卷二「天保十己亥年二月廿日鈔於昇仙葯室灯下了菡臯坂立節春璋六十五歲同年二月四日校」

卷三「天保十癸亥年二月廿三日於昇仙葯室而窗下鈔了菡臯坂立節春璋六十五歲同年三月四日灯前校」

卷五「文政庚寅八月二十九日得之於尾張淺井正翼校読一過謹蔵于宝素堂小島質誌天保十己亥年二月廿六日夜五上尅鈔於昇仙葯室灯前畢菡臯坂立節春璋六十五歲

同年三月四日校庚子六月 日鄧陳隆較読」

卷六「天保十己亥年二月廿八日鈔於昇仙葯室灯前了菡臯坂立節春璋六十五歲同年三月三日校本城直舎了 聖清二十五年己亥七月初七日以日本鈔本校于翰香家塾立秋節鄧陳隆沢誌」

卷八「天保八丁酉年十月二日手鈔菡臯坂昇仙葯室子坂璋六十三歲録此夜校一遍 聖清二十五年己亥七月朔日校于求志居之東舎鄧陳隆沢誌 庚子五月廿八日雨夜蚊子擾人不堪焚艾三校于三十六吉祥室」

卷九「天保八丁酉年十月四日以宝素堂鈔本手書駕了坂璋六拾三歲録 此卷首尾完全凡二十四頁」

卷十「天保八丁酉年十月廿四日灯前書写了坂璋六十三歲」

卷十一「天保八丁酉年十一月三日昇仙葯局灯前手鈔此夜雨雪徹夜炉火灸背坂璋六十三歲同月七日夜校此日誕辰」

卷十二「天保八丁酉年十一月六日夜二更手鈔于昇仙葯室灯前了坂璋六十三歲此夜一校了」

卷十三「保九戊戌年四月十一日手鈔于昇仙葯室畢臯坂春璋同夜校了」

卷十四「天保八丁酉年十二月十五日脚痺不得登朝在敝廬鈔此冊了畢夜校一過坂璋六十三歲誌」

卷十五「天保八丁酉年十二月六日亥中刻鈔了坂璋六十三歲識同月八日夜校一過此卷首尾完全校之今本素問足以補王註之不及真性命之書也宝之重之求志居主人記」

卷十七「天保八丁酉年十二月十八日本城直舎灯下自鈔坂璋六十三歲天保九戊戌年正月八日校」

- 卷十九「天保九戌戌年正月五日灯前臨鈔了昇仙葯室主人坂春璋六十四歲誌」  
 (卷廿二)「天保九戌戌年三月廿六日鈔了蒨阜昇仙葯室主坂璋六十四歲廿七日夜校了 此本首尾斷爛無知幾卷弟淺井正封云是当卷廿二」  
 卷廿三「天保九戌戌年正月八日予有微恙南窗曝背鈔了蒨阜坂春璋六十四歲同夜對校」  
 卷廿四「天保九戌戌年正月廿八日夜灯前書之畢坂春璋六十四歲」  
 卷廿五「天保九戌戌年春二月六日春日照々晒背於南窗鈔了昇仙主人坂立節璋六十四歲」  
 卷廿六「天保九戌戌年春二月十日申牌微陰風氣料峭老病疝痕微動不堪寒灸背於被炉鈔畢蒨阜坂立節春璋六十四歲」  
 卷廿七「天保辛卯三月望据尾張淺井正翼三經樓鈔本鈔補斯一賬質判 天保九戌戌年春二月廿五日終日陰雨背被炉書昇仙主人坂璋六十四歲」  
 卷廿八「天保九戌戌年三月二日終日春雨瀟灑老憊不能外凭几背炉灸腰脊鈔之了同月六日校蒨阜坂立節璋六十四歲 聖清二十五年己亥歲七月八日下午大雨平地水漲一尺雨窗無事以影宋本內經局板靈枢校讀于翰香家塾鄧鼎陳隆沢誌」  
 卷廿九「天保九年戊戌三月五日三皿一点挑灯鈔了蒨阜昇仙葯室主人坂璋六十四歲同七日校」卷卅「天保九戌戌三月廿九日小尺鈔于昇仙葯室南窓了蒨阜昇仙葯局主人坂璋六十四歲四月朔夜校了」  
 21 『国立故宮博物院善本旧籍総目』(民国七二年)下・六八五頁著録。登録番号、函五〇三、天〇六六七、観五九六。本書の書誌については、真柳誠「故宮博物院所蔵の古典籍(一)」、『漢方の臨床』四九一、二〇〇二を参照されたい(一五二(三頁))。

- 22 「是書久無伝本、曩歲平安福井棟亭得第廿七卷摸刊以伝、既而小島学古閣尾藩淺井正翼、就仁和寺書庫鈔得廿餘卷、亟使書手杉本望雲就而謄録以帰即是本也。」(『経籍訪古志』卷七 黄帝内経太素三十卷の条)。  
 23 蔵書印は「王懿栄印」「世為史官」、「徐乃昌」「積学齋徐乃昌蔵書」「南陵徐乃昌校勘経籍記」「曾在蘇继卿処」「復旦大学図書館蔵」。  
 24 『文献家通考』参照、王懿栄(一一五〇—五三頁)、徐乃昌(一三四五—四九頁)。  
 25 表紙に楊守敬による識語がある。「此書所引中土佚書甚多、即不/佚者亦異同甚多。以源順当中土唐代、所見皆唐本故也。守敬記 此書雖卷帙無多、其可宝不在慧琳音義下。」  
 26 『儒門事親』の解題については、『和刻漢籍医書集成 第二輯』(エンタプライズ、一九八八)所収の真柳誠の解題を参照した。  
 27 儒門事親十五卷 金張從正撰 明吳勉学校 日本渡辺栄訓点 正徳元年序 京都渡辺氏松下鶴堂蔵据万曆中刊本重校刊 全五冊  
 双辺、匡郭内H一九八×W二二八。無界、一〇行二〇字。単黒魚尾、版心「儒門事親 卷之一」。首「金張戴人先生著/儒門事親/洛陽松下睡鶴堂蔵板」(封面)「淡茶墨刷」、次「新鐫儒門事親叙」末曰「正徳辛卯八月望日渡辺栄元安甫書于洛陽松下睡鶴軒」(六行一六字、全四丁)、次「重刊儒門事親序」末曰「嘉靖辛丑三月戊子復元道人邵輔序」(全一丁)、次「儒門事親後序 跋」末曰「嘉靖十九年歲次庚子孟冬朔日錢唐聞忠機于南圃陋室中」(全一丁)、次「儒門事親論方目錄」(全一六丁)、次「儒門事親卷之一/戴人張子和著/新安吳勉学校/七方十劑繩墨訂一」(全四〇丁)、以下卷二(全四四丁)、卷三(全三八丁)、卷四(全一九丁)、

卷五(全一八丁)、卷六(全四四丁)、卷七(全二〇丁)、卷八(全八丁)、卷九(全九丁)、卷十(全一八丁)、第十一(全三二丁)、第十二(全四〇丁)、卷十三(全一七丁)、卷十四(全三三丁)、第十五(全五四丁)。印記「浙江圖書館珍藏善本」、「京六かく通／柳枝軒／御かう町西へ入」(卷十五、五四丁裏)。

28 文政三年は、干支と閏月からみて文政十三年(天保元年)の誤記である。

29 多紀元簡の考証は、以後の『儒門事親』研究の基礎となったものと見られるので、全文を引用しておく。版本と小島の鈔出とに若干の異同がある。

「驪恕公忠(※目黒道琢)嘗言儒門事親一書、前三卷、議論精確、文亦俊逸、後八卷、乃体裁殊異、必是別一種書、或出于門人之手焉。後関心印紺珠経云、小島ナシ子宛丘人、氏張、戴人是也。有儒門事親三十篇、十形三療一帙、治病百法一帙、三復指迷一帙、治版本ナシ(法)心要一帙、三法六門世伝方一帙。今考之、小島ナシ於 医統正脈所收本、從第一卷七方十劑繩墨訂、至第三卷水解、凡三十篇、此即儒門事親也。自第四卷、至第五卷、別是一書。自第六卷、至第十一卷、乃十形三療也。自第十二卷、至第十五卷、乃三法六門世伝方也。尋借元板於西京伊良子氏而抄之、凡三卷、首有中統年間高鳴序、及金人張頤齋序、後有金人無名氏跋、篇數与紺珠経所載符矣。恕公没十餘年、惜不見此書焉。

朝鮮所輯医方類聚、多引十形三療三法六門。今医統正脈本儒門事親中並有之。『医賸』上、三二丁裏三二丁表)

30 「辞世詩」は、「医統正脈」所収本の目録末に「太医先生辞世詩仍附于後」とあるが、すでに詩は欠いていたため、和刻本もこれを踏襲して、その眉注に「此詩舶来本共關須後考」とみえている。「辞世詩」は嘉靖版の末に付されており、宝素も嘉靖版を蔵したが、所蔵本はこの部分を欠いていた。そこで、多紀家蔵本を

借りてこの部分を鈔補したのである。

31 「後序」も、宝素所蔵嘉靖版本に欠いていたため、多紀家蔵本を借りてこの部分を鈔補した。「後序」は和刻本にも収録するが、それを取って鈔補しているのは、嘉靖版の写刻体の資料保存のためと、後序撰者の読みに問題があると見たからではないだろうか。

32 『国立故宮博物院善本旧籍目録』(民国七二年)下・六九七頁。登録番号一函四六九、觀七九一、天〇九二九、故觀〇二七一七。無辺、紙形H二四九×W一六六。無界。首高鳴「序」末曰「中統某年秋九月三日高鳴敬書」(全二丁、七行一二字)、次頤齋「引」末曰「昭陽單関陽月晦日頤齋引」(全四丁、七行一四字)、次「太医張子和先生儒門事親目錄」(全二丁)、次「太医張子和先生儒門事親卷第一／七方十劑繩墨丁一(一七)」(全三二丁)、次「卷第二／(十一)二十」(全三二丁)、次「卷第三／(二十一)三十」(全二八丁)、次寓齋居士「儒門事親書後序」末曰「甲辰冬十月朔題」(全四丁、七行一四字)。本書の書誌については、真柳誠「故宮博物院所蔵の古典籍(五)」、『漢方の臨床』四九一六、二〇〇二)を参照されたい(八四〇～四二頁)。

33 「辛卯十月廿一日夜、從聿修原写本対校、間有一二不可読、傍參挿架嘉靖刊本、朱記於上方、友人奈須菊菴為予同読。質」(卷一末、朱筆)。「辛卯十月廿二日、照聿修堂蔵本、与奈須菊菴校於奈須氏之八昌院。質記」(卷二末、朱筆)。「天保二

34 多紀氏鈔本では高鳴序が卷二の前に位置する点が、小島鈔本との相違点である。

- 35 国立国会図書館所蔵・森立之鈔『河清寓記』(二二丁表)。『日本医史学雑誌』四二卷四号六〇〇頁(一九九六)に筆者による翻刻あり。
- 36 「案昭陽單闕、在金亡之後九年、乃宋理宗淳祐三年癸卯也。頤齋金人、故不用宋号耳。寓齋後序、成於甲辰、称張君耀卿之引、則知頤齋者張之別号歟。」(頤齋引の末)
- 37 『国立故宫博物院善本旧籍目錄』(民国七二年)下・六九七頁。整理番号一函四六九、觀七九〇、天〇九二八、故觀〇二七一二〇二七二一〇二七二一六。單辺、匡郭内H一九七×W一四九。有界、一〇行二〇字。白口、版心「儒門事親卷之三 一介后齋」。首邵輔序「獲宝璐…嘉靖辛丑三月戊子復元道人邵輔序」(存末半丁)、次「儒門事親卷之三/戴人張子和著/喉舌緩急砭藥不同解二十一」(全三八丁)、次「卷之四」(全二〇丁)、次「卷之五」(全二八丁)、次「卷之六」(全四三丁)、次「卷之七」(全二〇丁)、次「卷之八」(全八丁)、次次「卷之九」(全九丁)、次「卷之十」(全一九丁)、次「卷之十一」(存三三丁、未缺)、次次「卷之十二」(全四〇丁)、次「卷之十三 劉河間先生三消論」(全一七丁)、次「卷之十四」(全一四丁)、次「卷之十五」(存五五丁、未缺)。
- 38 「文政十三年閏三月三日讀於直舎 質記」(卷四末)、「文政十三年閏三月廿四日一校了」(卷五末)、「四月廿七日加一見畢(花押)」(卷七末)、「文政十三年孟秋四日、与奈須瀋菴同校讀一過、時炎蒸催眠、拭日記之。觀某生質識於宝素閣」(卷十末)。
- 39 『医方類聚』については、三木栄『朝鮮医書誌』(学術刊行会、一九七三増補)を参照した。
- 40 伝存未詳のため想像の域を出ないが、多紀元昫が『医方類聚』所引本文を『儒

門事親』に書き入れた本ではなかったか。

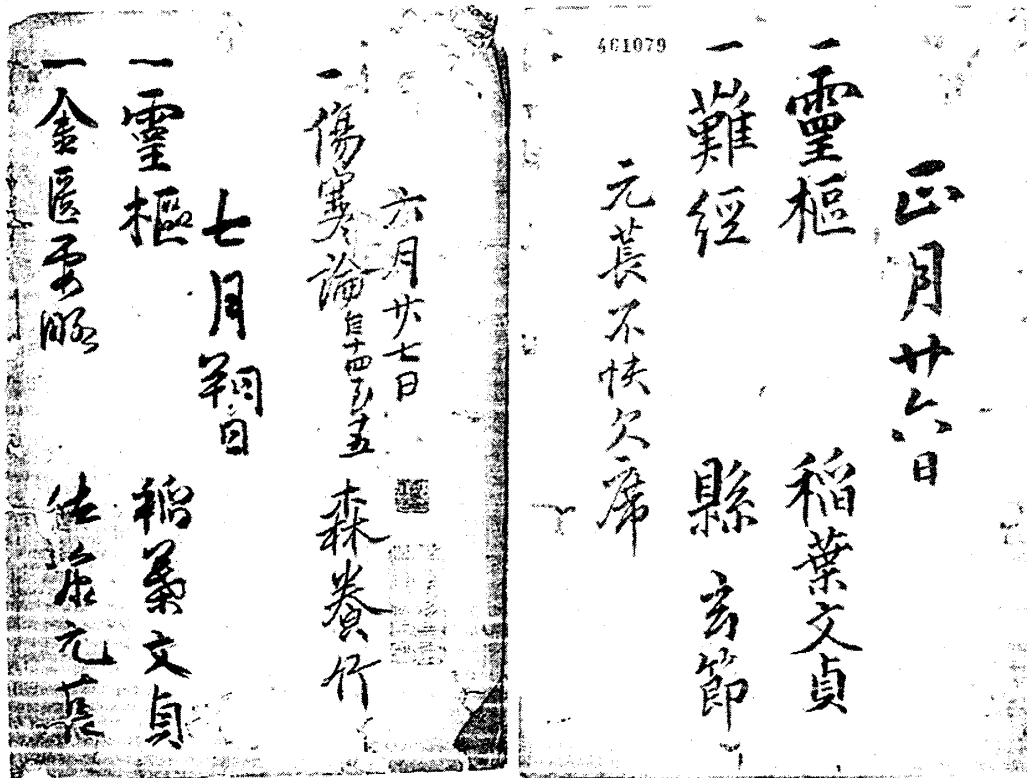


図1：上海図書館所蔵『医学講習会日程』（『躋寿館出席留』零葉）

右：巻首、左：10丁表（慶応二年の幕府医学館における講習記録）

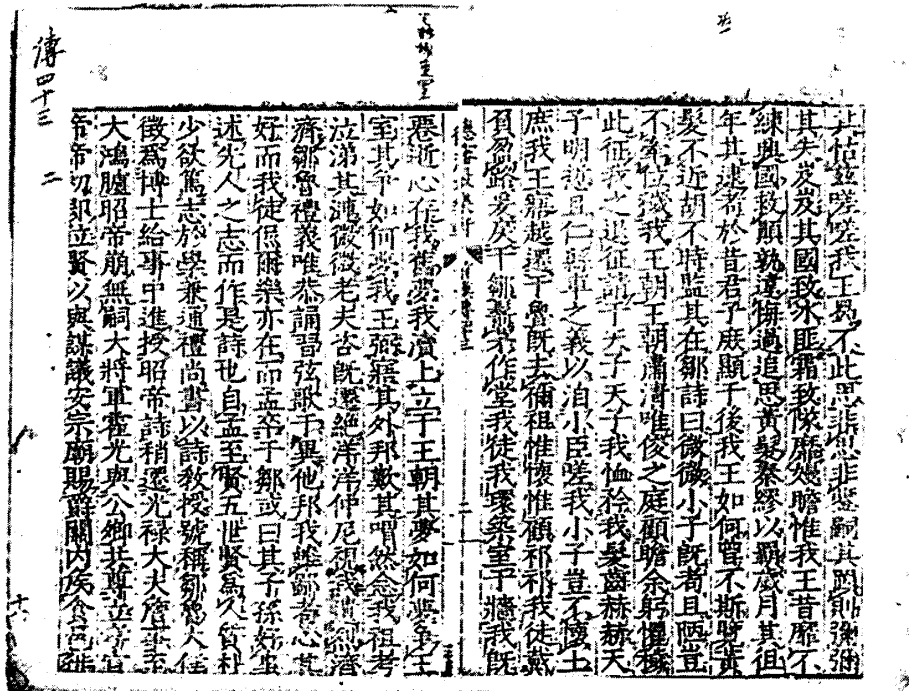


図2：『躋寿館出席留』裏面にうらうちされた明・徳藩最楽軒本『前漢書』零集  
左端の書入れは森立之の筆跡

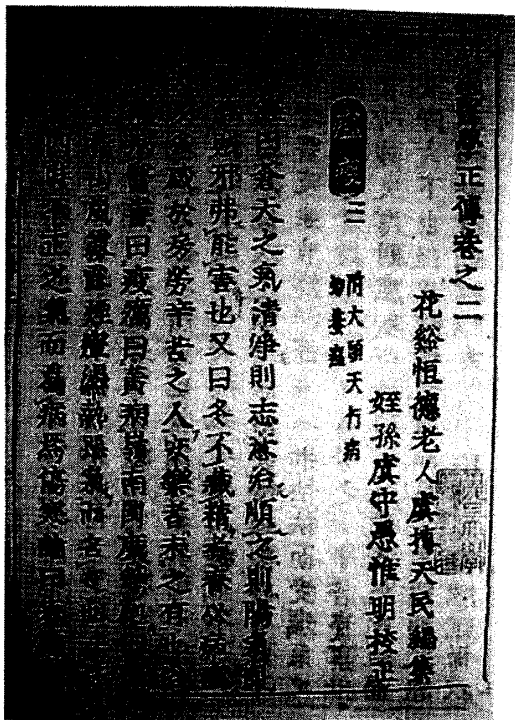


图 4—1：復旦大学図書館所蔵  
古活字本『医学正伝』卷二首

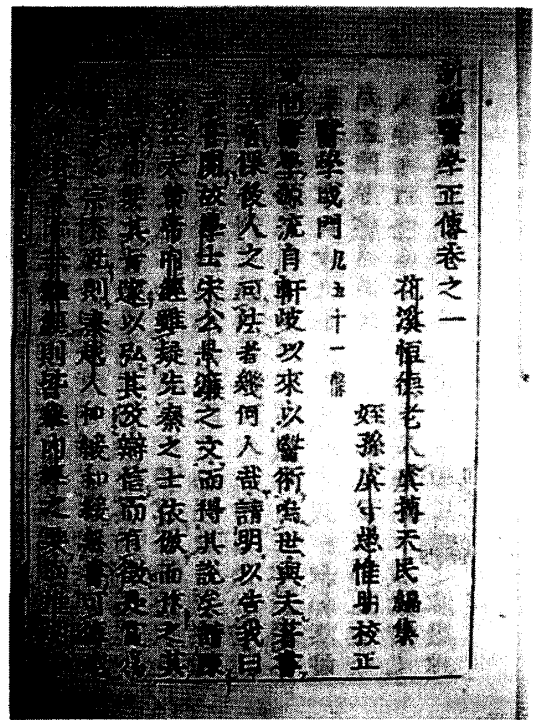


图 3：復旦大学図書館所蔵  
古活字本『医学正伝』卷一首

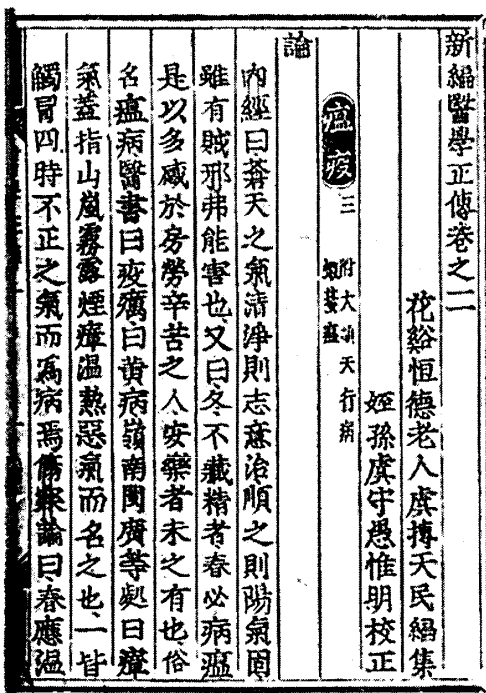


图 4—3：研医会図書館蔵  
古活字本『医学正伝』(B本) 卷二首

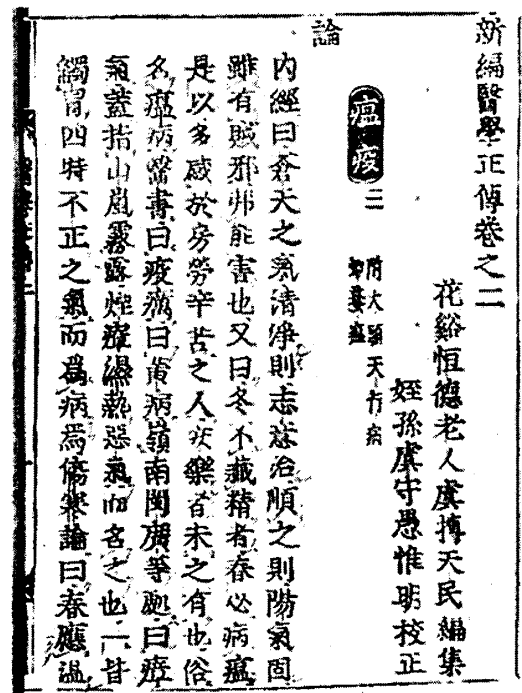


图 4—2：研医会図書館蔵  
古活字本『医学正伝』(A本) 卷二首



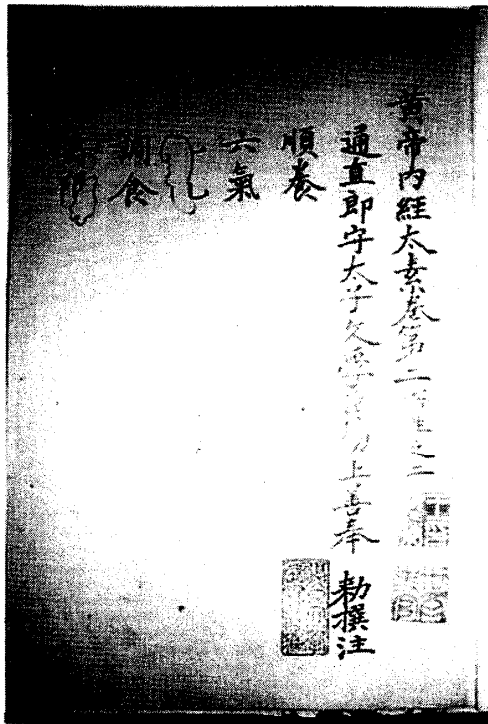


図6—1：復旦大学図書館所蔵  
坂春璋妙『黄帝内経太素』卷二首

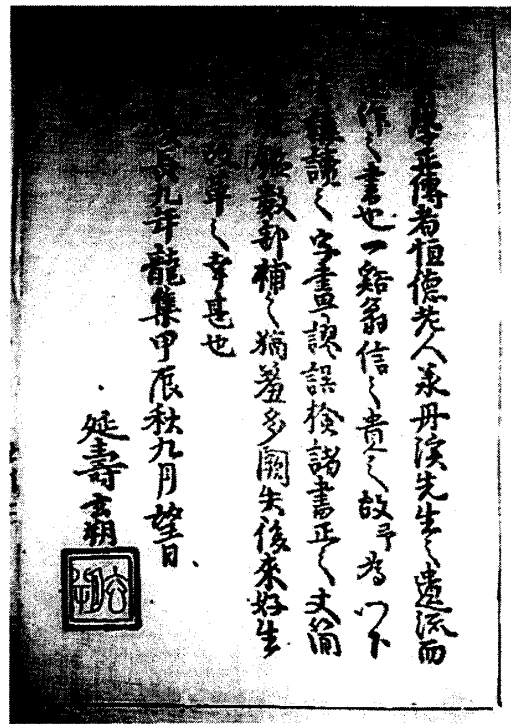


図5：復旦大学図書館所蔵  
古活字本『医学正伝』卷八末 曲直瀬玄朔跋

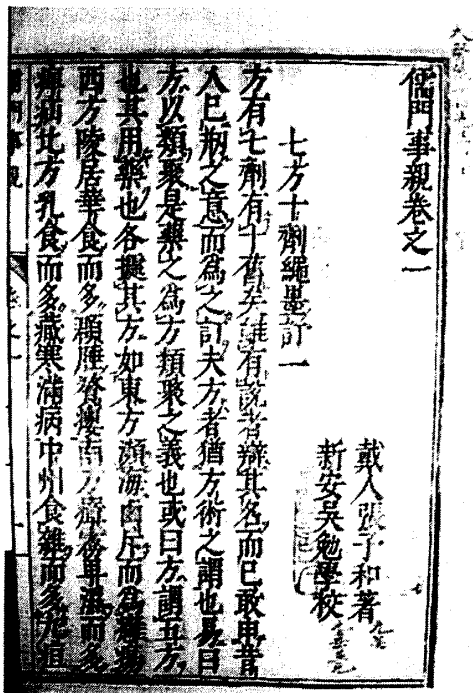


図7：浙江図書館所蔵 小島宝素手沢『儒門事親』卷一首  
朱筆入れは宝素による元版・明嘉靖版との校異

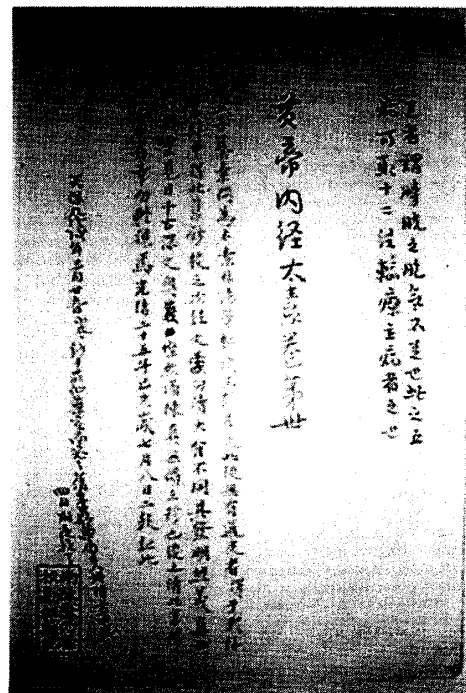


図6—2：復旦大学図書館所蔵 坂春璋妙  
『黄帝内経太素』卷三十末 坂春璋妙と陳隆沢の跋

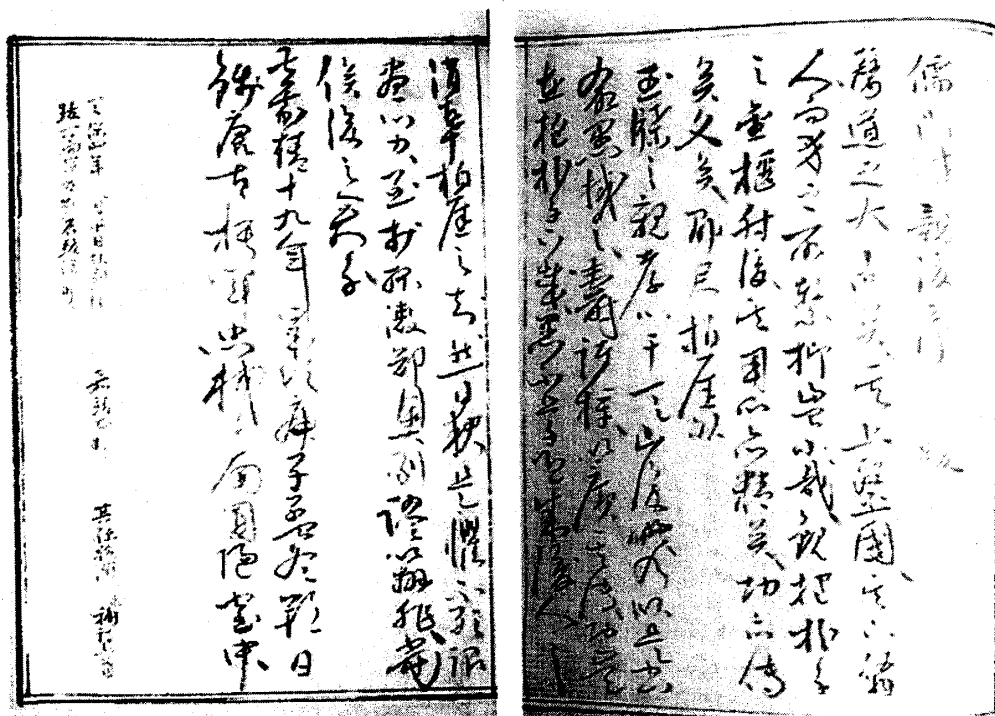


图8：浙江圖書館所藏 小島寶素手沢『儒門事親』卷一首  
卷十五末に附された寶素手鈔にかかる「儒門事親後序」

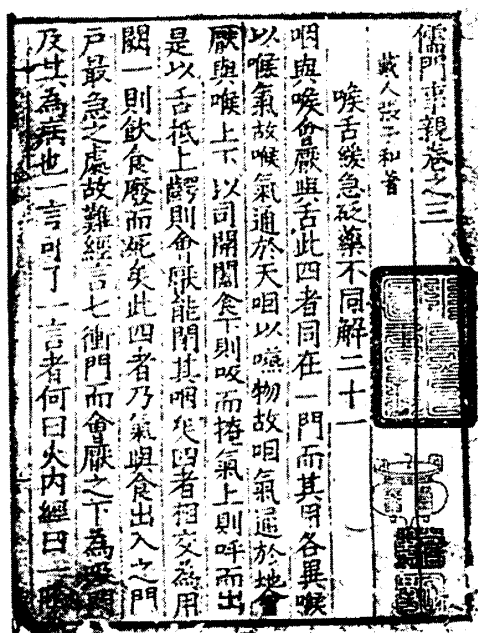


图10：台湾故宮博物院所藏 小島寶素旧蔵  
明嘉靖版『儒門事親』卷三首

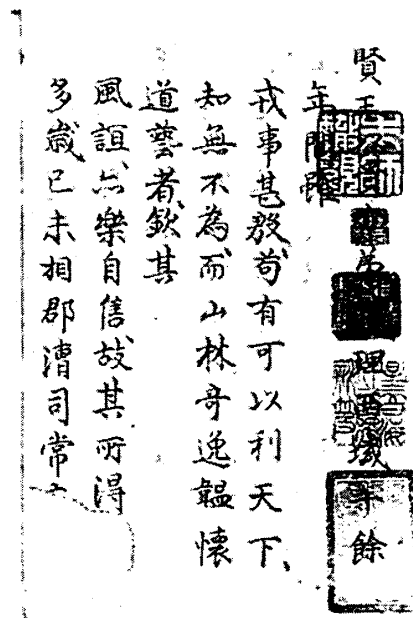


图9：台湾故宮博物院所蔵  
小島寶素手鈔『儒門事親』卷首

資料

上海圖書館所藏日本關係古醫書目

凡例 以下に掲げる書目は、上海圖書館所藏古籍のうちの日本關係古医書のみを、カード目録から抽出して再編したものである。カード目録の記載に従うことを原則とし、誤りと見られる記述もそのままに存した。あわせて王宝平主編『中国館蔵和刻本漢籍書目』『中国館蔵日人漢文書目』（杭州大学出版社、一九九五、一九九七）を参看し、前者著録には通し番号の次に●、後者著録には○、（筆者の見落とし等による）カード目録未検出書は〈〉を付した。

医学類

全書之属

- 1 ●合類李挺先生医学入門十七卷（日）八尾玄長輯（明）李挺撰 日本寛文六年（1666）刻本二〇冊 長335438—57
- 2 又七冊 395237—43
- 3 ●三因極一病証方論十八卷（宋 青田）陳言（無撰）撰 日本元祿六年（1693）平安書林橘枝堂刻本 六冊 長334857—62
- 4 ●儒門事親十五卷（金）張子和（載人）撰 日本正徳元年（1711）渡辺氏洛陽松下睡鶴堂刻本 五冊 405255—59
- 5 又長335720—24

6 校正大字医学正伝八卷（明花溪）虞搏（天民）撰 日本万治二年（1659）吉野屋権兵衛刻本 八冊 長335256—63

（●新編医学正伝八卷 明虞搏編 日本慶安元年（1648）刊本 存卷一）

7 ●万病回春八卷（明金谿）龔廷賢輯 日本正保四年（1607）刻本 八冊 長555409—16

8 ●雲林医聖普慈航八卷（明金谿）龔廷賢輯 日本刻本 八冊 497181—88

9 ○病家要覽八卷（日）中山信義（三柳）撰 日本寛文十二年（1672）吉野屋権兵衛刊本 四冊 長335346—49

10 ●医通纂要四卷（日）膝謙齋輯 日本安永五年（1776）浪華積玉圃・定栄堂合刻本 四冊 410362—65

（●東垣十書 日本翻刻明嘉靖遼藩王梅南書屋刻本）

（综合性医書之属）

医経之属

内経

- 11 ●重広補註黄帝内経素問二十四卷 新刊黄帝内経靈枢二十四卷（唐）王冰（啓玄子）注（宋）林億校 日本寛文三年（1663）翻刻明万曆周氏对峯刻本 一八冊 靈枢無注 長347017—34
- （●重広補註黄帝内経素問二十四卷（唐）王冰注（宋）林億等校正孫兆改誤 日本寛文年間刻本）
- （●新刊黄帝内経靈枢二十四卷（唐）王冰注（宋）史崧音釈 日本寛文三年（1663）刻本 清李浩批校）

- 12 重広補註黃帝內經素問二十四卷 (唐) 王冰 (啓玄子) 注 (宋) 林億校 日本安政四年 (1857) 倣宋刻本 九冊 516075—83
- 13 素問識八卷 (日) 丹波元簡撰 日本天保八年 (1837) 聿修堂刻本 六冊 長440108—13
- 14 素問識八卷解題一卷彙考一卷 (日) 丹波元簡撰 日本天保八年 (1837) 聿修堂刻本 一〇冊 長334909—18
- 15 黃帝內經太素三十卷 存卷二、三、五、六、八、至二十一 (隋) 楊上善注 日本鈔本 八冊 489970—77
- 陰陽五行及運氣
- 16 〇運氣論奧疏鈔十卷 (日) 松下見林撰 日本寬文五年 (1725) 刻本 五冊 長336459—63
- 17 運氣論奧纂要全解三卷 (日) 閑流子三屋元仲撰 日本貞享元年 (1684) 刻本 七冊 467128—34
- 18 運氣纂要函說三卷附錄一卷 (日) 閑流子元仲撰 日本貞享元年 (1684) 刻本 七冊 467135—41
- 難經
- 19 難經本義二卷首一卷 (戰國) 秦越人撰 (元) 滑寿注 (明) 呂復校正 日本寬永十年 (1633) 吉田原仁左衛門 二冊 389679—80
- 20 (王翰林集註) 黃帝八十一難經五卷 (盧國) 秦越人撰 (吳) 呂広等註解 (明) 鄒鼎) 王九思校正 日本慶安五年 (1652) 武村市兵衛刊本 二冊 長335482—83
- 21 〇難經注疏二卷附三焦辨一卷 (日) 名古屋玄医撰 日本天和三年 (1683) 門人伊藤素安刻本 二冊 長335407—08
- 22 〇黃帝八十經疏証二卷 (日) 東都) 丹波元胤撰 日本文政二年 (1819) 聿修堂刻本 二冊 長335426—27
- 23 又一冊 長012653
- 24 難經注疏二卷 (戰國) 秦越人撰 (日) 丹波元胤疏証 附解題一卷 (日) 丹波元胤撰 民国二十四年 (1935) 上海中醫書局鉛印本 一冊 395683
- 傷寒金匱之屬
- 25 趙開美傷寒論 長004418
- 26 校正傷寒論十卷 (漢) 張機 (仲景) 撰 (晉) 王叔和編 (宋) 林億校正 日本寬政九年 (1797) 刻本 一冊 549858
- 27 註解傷寒論十卷 (漢) 張機撰 (晉) 王叔和編 (金) 成無己校正 日本天保六年 (1835) 躋壽館刻本 三冊 347036—38
- 28 傷寒大成 (清) 長洲) 張璐 (路玉) 等撰 日本文化元年 (1804) 翻刻本 (張氏医書七種) 七冊 311639—45
- 29 傷寒大成 (清) 長洲) 張璐 (路玉) 等撰 日本文化9年 (1822) 思得堂刻本 五冊 531994—98
- 30 〇傷寒論後條辨十五卷 (清) 新安) 程應旆 (郊倩) 注 附傷寒論原本編次 (漢) 南陽) 張機 (仲景) 撰・傷寒論條辨編次 (明) 方有執 (中行) 撰・傷寒論尚論篇編次 (清) 喻昌 (嘉言) 撰合一卷 日本寶永元年 (1704) 博古堂刻本 八冊 414601—08
- 31 〇傷寒論集成十卷首一卷 (日) 山田正珍撰 日本寬政元年 (1789) 刻

- 天保三年(1832)補刻本一〇冊 404741—50
- 32 傷寒論識六卷 (日) 淺田栗園撰 民國二十年(1931)上海六也堂藥局鉛印本 六冊 571158—63
- 33 ●傷寒広要十二卷 (日) 丹波元堅撰 日本文政十年(1827)聿修堂刻本(存誠藥室叢書)
- 四冊 長335363—66
- 34 又 562502—07
- 35 ●傷寒論述義五卷補一卷 (日) 丹波元堅撰 日本天保十五年(1844)存誠藥室刻本(存誠藥室叢書) 二冊 長335471—72
- 36 傷寒論述義五卷補一卷 (日) 丹波元堅撰 民國二十年(1931)上海六也堂藥局鉛印本 二冊 571156—57
- 37 傷寒論述義五卷補一卷 (日) 丹波元堅撰 民國二十四年(1935)上海中醫書局鉛印本(聿修堂醫藥叢書) 一冊 533497
- 38 傷寒論輯義七卷 (日) 丹波元堅撰 日本文政五年(1822)聿修堂刻本一〇冊 長335458—67
- 39 傷寒辨術一卷 (日) 淺田惟常撰 日本弘化四年(1847)刻本 一冊 470439
- 40 医学質験五種 傷寒啓微三卷 (日) 片倉元周撰 日本寛政六年(1794)静儉堂刻本 三冊 長97596—98
- 41 傷寒論類編十三卷 一名傷寒雜病論類編 (日) 小島瑞纂註(日) 大島變刪定 日本文政二年(1819)省菴刻本 一二冊 558658—69
- 張仲景傷寒論貫珠集八卷(清)尤怡註釈 日本文政九年(1826)小川汶庵稽古齋刊本)
- 42 ●金匱玉函經八卷 (漢南陽) 張機著(晋高平) 王叔和撰次(宋) 林億等校正 日本延享三年(1746)平安成美堂刻本 三冊 長335383—83
- 43 ●金匱要略註解二十三卷 (日) 名古屋玄醫註 日本元祿九年(1696)男玄篤刻本 四冊 長335379—82
- 44 ●金匱要略方論輯義六卷 (日) 丹波元簡撰 日本文化八年(1811)聿修堂刻本 一〇冊 長335353—62
- 温病之属  
通論
- 45 ●瘟疫論類編五卷 (明廷陵) 吳有性(又可)撰(清諸城) 劉奎(松峰)評釈 日本享和三年(1803)京都尚書堂刊本 二冊 長335417—18
- 46 ○温疫方論解四卷首一卷 (日本) 泰山霧隱撰 日本文政七年(1824)刻本 五冊 388338—42
- (瘧痢)  
(瘧腦炎)  
(瘟疫)  
(痧病霍乱)
- 47 ●痧脹玉衡書二卷後卷一卷 (清構李) 郭志邃(右陶)撰 日本享保八年(1723)尚書堂刻本 三冊 長335376—78
- 内科之属

通論

48 内科新説三卷 (英国) 合信氏 (清江甯) 菅茂材合撰 日本安政六年 (1859) 桃樹園刻本一冊 589145

49 〇雜病広要三十卷 (日) 丹波元堅撰 日本躋寿館活字本三〇冊 46  
7194—223

(中風)

(肺癆)

(腎病)

(胃腸病)

脚氣

50 〇脚氣方論三卷 (日) 松井閱撰 日本寛延元年 (1748) 男松井泰刻本  
三冊 長335423—25

51 脚氣新論一卷 (日) 今村亮撰 日本明治十一年 (1878) 刻本一冊 5  
27871

(血症)

虫疾

52 蛭志三卷 (日) 喜多村直子温撰 日本嘉永二年 (1849) 学訓堂

刻本一冊 560074

其他

53 万病皆鬱論一卷 (日) 源通魏 (信陽) 撰 民国十九年 (1930) 上海国

医書局鉛印本 (国医小叢書) 一冊 537251

54 疝癥積聚編一卷 (日) 大橋尚因撰 民国十九年 (1930) 上海国医書局

鉛印本 (国医小叢書之二十) 一冊 537250

55 疝癥積聚編一卷 (日) 大橋尚因撰 民国二十六年 (1937) 上海国医書  
局石印再版本一冊 506945

外科之属

通論

56 〇瘍科秘録十卷 (日) 本間玄調撰 日本弘化四年 (1849) 本間氏自準  
亭刻本 (日文本 末冊附図彩色套印) 一二冊 388343—54

57 〇続瘍科秘録五卷 (日) 本間玄調撰 (日) 川又誠等輯 日本安政六年  
(1859) 本間氏自準亭刻本 (日文) 五冊 388355—59

58 〇瘍瘍機要三卷 (明古吳) 薛己撰 日本承応三年 (1654) 武村氏兵衛  
刻本三冊 392708—10

(癰疽及外科方)

(疗毒)

(麻風)

梅毒

59 微癘新書不分卷 (日) 片倉元周撰 日本天明六年 (1786) 東都静儉堂  
刻本二冊 長024476

60 微瘡証治秘鑑二卷 (日) 橘尚賢撰 清光緒十一年 (1885) 尊人堂刻本  
一冊 562750

(皮膚病)

五官科之属

眼科

61 銀海精微二卷 (唐) 孫思邈輯 日本摂陽書肆刻本二冊 長33523  
6—37

62 原機啓微二卷附錄一卷 (明吳郡) 薛己(新甫)撰 日本承応三年(1654)  
刻本三冊 558655—57

63 秘伝眼科全書六卷 (明武夷) 袁學淵(晴峰)撰 日本寛政三年(1791)  
崇高堂刻本二冊 長334774—75

64 眼科錦囊四卷統二卷 (日) 本庄俊篤撰 日本天保八年(1837) 刻浙  
胡許恒遠堂得版印本六冊 568485—90

(喉科)

(通論)

(舌喉)

(喉痧)

(口齒)

婦產科之属

通論

65 胎内教育 (日) 伊東琴次郎撰 (清) 陳毅訳 清光緒二十八年(1902)

上海広智書局鉛印本 一冊 571185

66 又一冊 長96332

67 〇産論翼二卷附録一卷 (日) 賀川玄迪(子啓)撰 日本安永四年(1775)

刻本一冊 長335107

(広嗣)

兒科之属

通論

68 幼幼精義三卷附名称義略一卷 (遠西) 扶歇蘭度撰(遠西) 薩窟設訳

(日) 堀内寛忠龍重訳 日本弘化二年(1845) 青黎閣刻本 一冊 長335  
191

69 經効産宝三卷統一卷 (唐) 咎殷撰 日本坳宋本重刻 清光緒七年(1881)  
婺源張氏得版重印本 一冊 長334908

痘疹

70 ●痘科鍵二卷麻疹一卷 (明宛陵) 朱巽(嘘万)撰 日本享保十五年(1730)

武于龍刊本二冊 長335395—96

(麻疹)

(種痘)

(驚風)

(其他)

(傷骨科)

鍼灸之属

通論

71 ●鍼灸甲乙經十二卷 (晋高密) 皇甫謐撰 日本寺町通本能寺前八尾勘

兵衛刻本 四冊 長335342—45

72 ●鍼灸資生經七卷 (宋) 王執中撰 日本寛文九年(1669) 村上氏刻本

七冊 347930—36

73 鍼灸資生經七卷 (宋) 大監王公輯 日本寛文九年(1669) 村上勘兵衛

刻本 四冊 長335477—80

- 74 ●神応経一卷 (明豊城) 陳会撰 日本正保二年 (1625) 田原仁左衛門刻本 一冊長335431
- 75 鍼灸要旨三卷 一名鍼灸素難要旨 (明四明) 高武纂 (日) 法橋岡本一抱子重訂 清末上海樂善堂重刻宝曆三年本 一冊 538988
- 76 又 二冊長006628
- 77 鍼灸要旨三卷 (明四明) 高武纂 (日) 法橋岡本一抱子重訂 民国二十一年 (1931) 上海中医書局影印本 (影印古本医学叢書第二集) 一冊 482922—23
- 78 鍼灸則一卷 (日) 菅沼撰 民国二十五年 (1936) 寧波東方鍼灸書局鉛印本 一冊 481474
- 79 鍼灸經驗方二卷 (朝鮮) 許任撰 日本享保十年 (1725) 大坂刻本 二冊長024472
- 灸法
- 80 備急灸法一卷 (宋) 張渙撰 清光緒十六年 (1890) 上杭羅氏日本景宋刻本 一冊 363027
- 81 又
- 82 又
- 83 又
- 84 又
- 85 又
- 86 黄帝明堂灸經三卷 (日) 小谷正一修補 民国二十八年 (1939) 油印本 一冊 439214
- 87 灸点図解一卷 (日) 佚名撰 鈔本 一冊長382683 (太乙神鍼)
- 經絡
- 88 十四經發揮三卷 (元許昌) 滑寿撰 日本刻本 一冊長382684 俞穴
- 89 經穴纂要五卷 (日) 小阪宮昇 (元祐) 撰 日本文化三年 (1808) 刻本 二冊長485407—08
- 90 ○經穴纂要五卷 (日) 小阪宮昇 (元祐) 纂 日本文化七年 (1810) 東都万笈堂刻本 (日本文) 五冊長388362—66
- 91 ○經穴彙解八卷 (日) 原昌克輯 日本文化四年 (1807) 叢桂亭刻本 八冊長335386—93
- 養生之属
- 綜合
- 92 衛生工事新論一卷 (日) 南部常次郎撰 (清吳鼎) 包公毅訳 清光緒二十九年 (1903) 広智書局鉛印本 一冊長423805
- 93 心身強健之秘訣一卷 (日) 藤田靈齋撰 (民国) 徐雲訳 民国二年 (1913) 鉛印本 (衛生叢書) 一冊 440769
- 94 又一冊 440770
- 95 又一冊 440771
- 96 又一冊 440772
- 97 又一冊 440773
- 98 又一冊 440774



(導引氣功)

(按摩推拿之屬)

診斷之屬

脉經

99 人元脉影帛指圖說二卷 (晋高平) 王叔和輯 (明鹿城) 沈際飛重訂 日本刻本 一冊 長335481

100 ●石頭老人診宗三昧一卷 (清) 張倬撰 (清) 張倬等編 日本文化元年 (1804) 翻刻本 一冊 311639

101 又一冊 531993

102 ○脉学輯要三卷 (日) 丹波元簡撰 日本寬政七年 (1795) 聿修堂刻本 一冊 長335428

103 又一冊 長440369

104 又一冊 347927

105 又一冊 590696

○脉学輯要三卷 (日) 丹波元簡撰 日本天保八年 (1837) 刻本

太素脉

106 ●鏗太上天宝太素張神仙脉訣玄微綱領宗統七卷 (唐) 張太素撰 日本承応二年 (1653) 翻刻明万曆二十七年 (1599) 劉氏安正堂刻本 二冊 3

98379—80

(四診八問)

(望診)

舌診

107 傷寒舌鑑一卷 (清長洲) 張登 (誕先) 撰 日本文化元年 (1804) 翻刻本 合冊 311640

(其他診法)

108 漢訳診病奇核二卷 (日) 丹波菴庭撰 清光緒十四年 (1888) 四明王氏日本鉛印本 二冊 476908—09

109 又二冊 555908—09

藏象与病理病機字之屬

藏象与骨度

110 全体新論不分卷 (英国) 合信氏 (清南海) 陳修堂合撰 日本安政四年 (1857) 翻刻清咸豐元年 (1851) 本 二冊 長018944

○正骨範二卷 (日) 二宮猷撰 日本文化五年1808刻本

諸病源候

111 ●重刊巢氏諸病源候總論五十卷 (隋) 巢元方撰 日本正保二年 (1645) 上村次郎右衛門刻本 三冊 405046—48

中医生理

112 生理衛生学不分卷 (日) 齋田功太郎撰 (清江陵) 田吳炤訳 清光緒年間漢川劉氏六古軒刻本 一冊 長381380

(中医病理)

本草之屬

綜合本草

113 ●神農本草經三卷序錄一卷攷異一卷 (日) 森立之輯 日本嘉永七年 (1854) 森氏温知葉室刻明治間刻本 (書名拋書名葉) 三冊 31183

4—36

114〔唐〕卷子本新修〕本艸二十卷補輯一卷（原闕卷一至二、六至十一、十六）（唐）李勣等修 清光緒十五年（1889）德清傅氏日本影刻本二冊長018918

115 經史証類大觀本草三十一卷（宋成都）唐慎微撰（審言）纂 日本明和六年（1769）江都医官望氏翻刻元大德六年（1302）宗文書院本二〇冊 398443—462

116 本草綱目五十二卷圖三卷奇經八脈考一卷瀕湖脈學一卷（明）李時珍撰 日本刻本三八冊 440008—45

117 本經逢原四卷 缺卷一（清長洲）張璐（路玉）撰 日本文化元年（1804）思德堂刻本三冊 531990—92

118 本經逢原四卷（清長洲）張璐（路玉）撰 日本文化元年（1804）思德堂刻本四冊 311409—12

（食物本草）

（炮制）

鑑別

119 一本堂葉選三卷附錄一卷統編一卷（日）香川修德撰 日本享保十六年（1731）文泉堂刻本四冊長335312—15

120 ●本草綱目補物品目錄二卷（日）後藤光生輯日本宝曆二年（1752）東都桜田和泉町書肆鶴本平藏刻本一冊長335375

121 ●本草綱目補物品目錄後編二卷（日）後藤光生輯（日）黒弘林補日本寛政元年（1789）稿本三冊長335372—74

122 ●質問本草内篇四卷外篇四卷附錄一卷（琉球）吳繼志撰 日本天保八年（1837）薩摩府学刻本五冊長335433—37

123 香字鈔一卷（日）佚名輯 民国三十年（1941）拋日本写本伝鈔二冊長422212—13

歌訣便読

124 藥性提要歌訣一卷（清吳江）郭学洪（竹薊） 民国九年（1920）吳江柳氏鈔本一冊長006654

125 藥性提要一卷（口）佚名撰 日本文化四年（1807）慶元堂刻本一冊 547567

圖譜

126 紹興校定經史証類備急本草書五卷（宋）高紹功等撰 附紹興校定本草

解題一卷（日文）（日）中尾万三撰 昭和八年（1923）東京春陽堂影印本六冊長018923

127 紹興校定經史証類備急本草圖五卷（宋）高紹功等撰 日本鈔本有元和江氏靈鶴閣所藏書籍記五冊 395282—86

128 本草圖譜九十三卷 存卷三十至三十三、三十五至三十八（日）岩崎常正 日本伝鈔彩繪本八冊長025662

（○）草木図説前篇二十卷（日）飯沼長順撰 日本明治七年1874平林莊刻本、存八卷（2、8、18）

（雜著）

（西藥）

方劑之属

歷代

- 129 藥治通義輯要二卷 (日本) 丹波元堅撰 民国二年 (1913) 成都存古書局刻本 一冊 473084
- 130 ●藥治通義十二卷 (日) 丹波元堅撰 日本天保十年 (1839) 刻本五冊 395277—81
- 晉唐
- 131 重訂肘後百一方八卷 (晉) 葛洪 (稚川) 撰 (梁) 陶弘景 (隱居) 補 日本宝曆七年 (1757) 撰陽書林刻本 卷二卷四鈔配 四冊 560603—06
- 132 重刊孫真人備急千金方三十卷 (唐) 華原 孫思邈撰 日本天明五年 (1785) 刻本 三冊 439930—60
- 133 重刊孫真人備急千金方三十卷 (唐) 華原 孫思邈撰 (宋) 林億等校正 日本寬政十一年 (1799) 平安後藤敏刻本 三冊 長 335205—35
- 134 重刊孫真人備急千金方三十卷 存卷六至三十 (唐) 華原 孫思邈撰 日本寬政十一年 (1799) 京都刻本 二六冊 389696—721
- 135 備急千金要方三十卷附考異一卷 (唐) 華原 孫思邈撰 (宋) 林億等校正 正考異 (日) 多紀元堅等撰 日本嘉永二年 (1829) 江戸医学抄北宋本景刻三四冊 長 403009—42
- 136 備急千金要方三十卷 缺卷二十六至三十 (唐) 華原 孫思邈撰 (宋) 林億等校正 日本嘉永二年 (1849) 江戸医学抄北宋本景刻 一〇冊 439084—93
- 137 備急千金要方三十卷附考異一卷 (唐) 華原 孫思邈撰 (宋) 林億等校正 正考異 (日) 多紀元堅等撰 日本嘉永二年 (1829) 江戸医学抄北宋本景刻 清光緒四年 (1878) 得版上海印本 一二冊 347075—86
- 138 備急千金要方三十卷附考異一卷 (唐) 華原 孫思邈撰 (宋) 林億等校正 正考異 (日) 多紀元堅等撰 日本嘉永二年 (1849) 江戸医学抄北宋本景刻 清光緒四年 (1878) 得版蘇州印本 一二冊 長 017702
- 139 又一二冊 長 655458—69
- 140 千金翼方三十卷千金要方三十卷附考異一卷 (唐) 華原 孫思邈撰 (宋) 林億等校正 正考異 (日) 多紀元堅等撰 日本江戸医学抄北宋本景刻 要方抄北宋本景刻 清光緒四年 (1878) 長洲麟瑞堂得版重印本 二四冊 長 402363—86
- 141 又一〇冊 439094—113
- 142 千金翼方三十卷 (唐) 華原 孫思邈撰 (宋) 林億等校正 日本江戸医学抄元大德本景刻 清光緒四年 (1878) 長洲麟瑞堂得版重印本 八冊 長 655470—77
- 143 又八冊 347067—74
- 144 千金翼方三十卷 (唐) 華原 孫思邈撰 (宋) 林億等校正 日本寬政十二年 (1829) 年景刻元大德本 (清) 光緒四年 (1878) 版歸上海印刷 八冊 長 017703
- 145 千金翼方三十卷 (唐) 華原 孫思邈撰 (宋) 林億等校正 (明) 金壇 王肯堂 (宇泰) 等重校 日本明和六年 (1769) 鹿門華本重刻本 一三冊 長 35192—204
- 146 重訂唐王燾先生外台秘要方四十卷 (唐) 王燾 (郿人) 撰 (日) 山脇

尚德校 日本延享二年(1746)平安養寿院刻本 二四冊 長335316—

39

宋金元

147 普濟本事方十卷續集十卷 (宋) 許叔微撰 日本享保二十一年(1736)

大坂向井入三郎刻本 五冊 389691—95

148 又五冊 3470987—91

149 又五冊 長335367—71

150 ●局方發揮一卷 (元義烏) 朱震亨撰 日本元祿二年(1689)書肆武村

新兵衛刻本 一冊 長335432

151 南北經驗医方大成鈔十卷 一名医方大成論鈔 (日) 埜釈玄幽輯 日本

慶安二年(1649)林甚右衛門刻本 五冊 414622—26

(明)

清

152 ○驗方新編十八卷 佚名輯 清光緒十八年(1892)日本横浜中華會館鉛

印本 一冊 613390

153 驗方新編十八卷 民国日本横浜中華會館鉛印本 一冊 44064

8

(民国)

(歌訣)

(成方藥目)

外国

○医心方三十卷附札記一卷 (日) 丹波康賴撰 日本安政元年刻本

○医心方三十卷附札記一卷 (日) 丹波康賴撰 日本万延元年刻本

154 諸病主藥一卷附十四經穴分寸歌一卷傍通訣一卷 (日) 尾張医学館輯

日本天保十二年(1841)刻本 一冊 長90202

155 吐方考一卷 (日) 独嘯庵撰 民国二十五年(1936)上海国医書局鉛印

本(国医小叢書) 一冊 506943

156 又一冊 548108

157 ○瘦狗傷考一卷附錄一卷 (日) 原昌克(子柔)撰 日本天保七年(1836)

青藜閣刊本(叢桂亭隨筆之一) 一冊 長382682

158 觀聚方要補十卷 (日) 丹波元簡輯 日本文政二年(1819)聿修堂刻本

一〇冊 長336720—29

159 良方不分卷 佚名輯 日本鉛印本 一冊 長024473

(方剂学)

医案之属

160 ●石山居士医按八卷 (明祁門) 汪機(省元)撰 日本元祿九年(1696)

大坂洪川清右衛門刻本 八冊 405136—43

161 建殊錄一卷附錄一卷 (日) 巖恭撰 日本文政十一年(1828)刻本 一

冊 長382685

医話之属

162 (刻医無間子) 医貫六卷 一名趙氏医貫 (明) 趙猷可撰 日本毓秀堂

刻本 六冊 長749636—41

163 ●王宇泰医辨三卷 (明) 王宇泰撰 日本元祿五年(1692)刻本 二冊 長

335350—52

- 164 皇漢医学札記不分卷 (民国) 蔣国華輯 鈔本 一冊 490581
- 165 錦囊秘錄不分卷 鈔本 442505
- 166 ○医学院学範三卷 (日) 畑柳安惟和撰 日本天明六年 (1786) 平安医学院刻本 二冊 長336148—49
- 167 ○藤氏医談二卷 (日) 近藤明隆昌撰 日本享和三年 (1803) 柳原積玉圃·森本文金堂合刻本 一冊 長335108
- 168 又二冊 長382687—88
- 169 又二冊 398391—92
- 170 医要略說三卷 (日浪華) 岡吉(敬安)撰 日本天保二年 (1831) 玉淵堂刻本 三冊 555040—42
- 171 医則發揮五卷 (日) 河津卓子立撰 日本嘉永五年 (1852) 日新塾刻本 四冊 555043—46
- 172 陋医雜話一卷 (日) 木村良撰 日本明治十九年 (1886) 刻本 一冊 長335430
- 173 西医指要一卷 (日) 今村亮撰 日本明治十年 (1877) 勿誤藥室鉛印本 一冊 長0224475
- 174 東医寿世保元四卷 (朝鮮) 金容俊撰 日本大正十年 (1921) 博文書館鉛印本 一冊 492798
- 医史之属
- 175 ○証治古言二卷 (日) 江友益輯 伝鈔日本寬政元年 (1789) 本 二冊 404648—49
- 176 医事啓源不分卷 (日) 今邨亮(祇卿)撰 日本文久二年 (1862) 敬業館石印本 一冊 566041
- 177 又一冊 568295
- 178 ○医臚三卷附錄一卷 (日) 樸蔭拙者撰 日本文化六年 (1809) 東都青雲堂刻本 三冊 長335468—70
- 179 医学講習会日程 (日) 佚名輯 稿本 一冊 長461079
- 180 ○医官玄稿三卷 (日) 望三英撰 日本宝曆三年 (1753) 刻本 撰人原題鹿門山人 四冊 398387—90
- 181 又四冊 長382689—92
- (雜著之属)
- (法医之属)
- (獸医之属)